

寶久イハルス氏酸類構造ノ新説ヲ演説セラレ、右畢ツテ

因研究ノ成績ヲ述ブレ、本日出席會員二十名ナリ

驛遞局認可

明治十八年六月廿五日發兌

# 東洋學藝雜誌

東洋學藝社



第四拾五號





緒言

我邦人ノ理學ノ思想ニ乏シキハ識者ノ常ニ憂フルトコロナリ故ニ之ヲ救ハンカ爲ニ此雜誌ニ理學ニ關係アル文章ヲ掲載シテ其性質及ヒ功用ヲ世ニ明ニセンヲ力メタリ固ヨリ詰屈解シ難キコトノミヲ討論スルニ非スト雖トモ世尚ホ或ハ此雜誌ノ讀ミ難キヲ困シムモノナキニ非ス因テ更ニ其區域ヲ廣メ文藝上ニ涉レル平易ナル文章ヲモ其間ニ雜ヘ甘苦相半ナラシメ以テ世人ノ望ニ負ク無キヲ期スト云爾

目錄

論說

○通俗「ダルクウ井」進化ノ理 (第四十三號ノ續)

霞城山人

○羅馬盛衰論

木内重四郎

○譯文原語ヲ存スヘシ

内藤耻叟

○財政ノ監督權ヲ論ス

長崎剛十郎

理醫學講談會筆記

○地球ノ位置(前號ノ續キ)

寺尾壽

雜報數件

應問

雜錄

○何故ニ北半球ニ大陸多キ歟

○井上哲次郎氏來翰

學會記事

第五卷第四號



東洋學藝雜誌第三卷第四十五號

明治十八年六月廿五日發兌

○ 通俗「ダルウ井ン」進化ノ理(第四十三號ノ續キ)

駿臺 霞城 山人 稿

我々ノ得タル古生物ハ未タ多カラス其得タルモノト雖モ  
 不揃ノモノ多キカ故ニ唯此一事ニテモ古生物學ハ進取ノ  
 肘ヲ掣セラル、憾アリ然ルニ他ニ之レカ阻害ヲナスモノ  
 尙少カラス之ヲ要スルニ大地三分ノ二ハ海水ノ下ニアル  
 ヲ以テ古生物搜索ノ路ヲ塞カレ他ノ三分一ノ陸地ト雖モ  
 其大半ハ山嶽アリテ我學業ノ天然ノ障礙タリ且ツ亞細亞、  
 亞弗利加、澳太利亞ノ大洲ハ其内地殆ト皆古生物ニ對シ  
 テハ未知ノ暗野ト謂ハサルヲ得ス  
 サレハ今日マテノ發見ハ我々ノ故園ナル歐羅巴ノ極小ナ  
 ル一局部ニ限ラレ就中偶然ノ發見多シトス「ダルウ井ン」  
 曰ク我曹ノ一大奇觀トスル古生物ノ蒐集モ之ヲ古世界ノ  
 眞境ニ比フレハ纔ニ方寸ノ地ニ就キ杜撰ヲ極メタル搜索  
 ヲリ得タル陳列ナリト眞ニ九牛ノ一毛ニモ及ハサル小數

ナレトモ既ニ其多キヲ我々ヲシテ喫驚セシム古世界ノ眞  
 境想フヘシ

古生物ノ發見ハ尙欽乏ノ多キニモ拘ラス又其發見ヨリ得  
 タル智識ノ微少ナルニモ拘ラス種々ノ地層ニハ種々相異  
 ナル古生物アリテ地層ノ年紀ノ異ナルニ從ヒ生物モ亦相  
 同シカラサルモノアリテ自ラ生物界ノ觀ヲ異ニシ生物ノ  
 愈古代ニ屬スルモノハ其形狀今日ノモノト懸隔スルヲ甚  
 シク地層愈新ナレハ生物モ亦現時ノモノニ能ク類シ新古  
 ノ區域上下ノ秩序アルヲ知リ隨テ地層所含ノ古生物ヲ以  
 テ其地ノ年紀如何ヲ監識スルノ憑據トナスニ至レリ就中  
 柔軟動物ノ貝殼ハ其素質石灰ナレハ化石トナリテ久存シ  
 易ク隨テ各地層ニ多ク封含セラル、ニヨリ地層ノ時代ヲ  
 識別スルニ無ノ標準トシ地質學ハ之ヲミチシルヘノ具ト  
 名ツケ其後種々ノ發見アリテ此論モ幾分ノ勢力ヲ失ヒタ  
 レトモ今猶世上ニ用ヲナセリ  
 地層ニ新古ノ秩序アリテ生物ノ形体モ時ニ隨ヒ一様ナラ  
 サル觀アルカ爲メ此ニ誤解ヲ下シ世界轉覆生物維新トイ  
 フ理論起レリ此理論ハ主トシテ「クフェル」氏ニ維持セラレ



近頃マデハ大抵一般ニ學者社會ニモ信用セラレタリ蓋シ此論ニ隨ヘハ時々地上ニ大變動ヲ起シ世界ヲ轉覆シ生物ヲ滅盡シ變動定リテ後更ニ復タ新世界新生物ヲ造出シ太初ヨリ此ノ如キ大變革ハ地層ノ全体ニ就テ大凡三十回或ハ四十回或ハ五十回モアリシトイヘリ然レトモ此理論ハ古生物學ノ發見セル數多ノ事實ニ反シ毫モ信用スヘカラス即チ其所謂世界ノ轉覆革命ノ際諸ノ生物カ盡滅シ虛無ノ界トナリシコハ地層ニ就テ證スベキノ跡ナク反テ永續種ト名ツクル生物ハ太古ヨリ今日ニ至ル各地層ノ内部ニ存在シ未タ曾テ其形狀ヲ變更セス（此類卑下海棲物ニ多シ）又種々ノ地層ヲ經歷シ漸次繁殖旺盛ノ域ニ達セルモノ之ニ反シテ次第ニ零落衰滅ニ歸セルモノ及ヒ同一ノ形ニシテ革命轉覆ノ前後ニ生存スルモノアリテ理論ノ主旨ニ戻ルコト多シ加フルニ此理論ハ諸有機體ノ原形ノ唯一ナル事實及ヒ諸生物互ニ親密ナル關係ヲ有スル事實ニ背ケリ何トナレハ太古ヨリ現世ニ至ル種々ノ地層内ニ同一ノ者類似ノモノ系族分脈自ラ脈絡相通スルノミナラス漸次年ヲ經ルニ從ヒ子孫後裔相續キテ歩ヲ

進メ階ヲ昇リシ跡アリテ單ニ或ル時代或ル地域ノ生物界ニ就キテモ箇々別々ナラス血統分派氣脈或通シ祖先如何ノ原ニ溯レハ一條ノ鉄鎖ニ等シク獨リ其時代又某地域ニ止マラス陸ノ西東時ノ古今ヲ論セス原形唯一關係密着シ太古既ニ滅亡セルモノモ目下尙生活スルモノモ此一鉄鎖一條ノ脈ヲ脱セス世界ヲ舉テ一家ヲナシ古今ヲ通シテ一命數ヲナスカ故ナリ抑モ生物界ニ此ノ如キ關係アルハ必他ニコレカ一大原因アリテ然ルモノニテ前ノ理論ノ妄ナルコト明ナリ

然レトモ此理論ハ學者社會ノ久シク正當視シタルモノニテ今猶此說ヲ株守スルモノアリ「クフェル」氏ハ實ニ此理論ノ柱礎ニシテ古生物ノ骨骼ヲ查明シ綱目系統ヲ分類シタル第一ノ人ナルガ其著述ニ係ル地皮變遷ト題セル書ニハ自家ノ理論ニ矛盾セル事實アルヲ舉ゲシノミナラス更ニ詳ニ其由テ來ル所ヲモ説キ殆ト「ダルウ井ン」氏ノ觀察ニ近キ考案ニマテ達セリ然レトモ正確ナル理論ヲ以テ之ヲ明カニセサリシハ誠ニ惜シムヘキコトナリ是レ他ナシ容易ノ事業ニアラサルニヨル然トモ毫モ同氏ヲ輕ニスルノ傾

キアルヘカラス何トナレハ今日尙世ニ在テ有名ナル「ア

生物種類ノ形狀ハ千萬不易ノモノナリ造化ノ手ヲ離レシ



ルノミナラス漸次年ヲ經ルニ從ヒ子孫後裔相續キテ歩ヲ

ノ事業ニアラサルニヨル然トモ毫モ同氏ヲ輕ニスルノ傾

キアルヘカラス何トナレハ今日尙世ニ在テ有名ナル「ア  
ガシ―ツ」(今ハ既ニ)其ノ如キモ彼ノ理論ヲ辨護セン  
カ爲メ左ノ如ク答フルヲ愧テサリキ

造化ハ一タヒ意ニ應シタル生物ヲ復ヒ造ルコトアリ

此一言ハ學藝ノ進歩人智ノ開闢ヲ阻絶スル丁恰モ人ノ鼻

先キノ門戸ヲ閉セルモノ、如ク彼ノ世界轉覆生物維新ノ

理論ハ猶吾曹ノ無學ヲ表シタル白狀書トモ稱スヘシ畢竟

是レ生物變遷自然作用ノ理ヲ明カニスル智識ヲ缺キタル

カ故ニ神ドイツ、エツキス、マシナヲ舞臺ヘ持出ストイフ諺ノ如ク事理明白ナラス

復タ如何トモシ難キ場合ニハ神力ヲ借テ落着セシムルノ

類ナリ當時哲學博士ノ名アル人ニシテ此說ニ左袒セシモ

ノ少カラス殊ニ笑フヘキ事ナリ因テ考レハ當時我々ノ學

問智識ノ位置ハ之ヲ彼ノ野蠻無識ノ西印度人カ新世界ノ

發見人ナル「コロムブス」カ海岸ニ到着セシ時何レノ地ヨ

リ來リシカヲ知ラス天ヨリ降りシモノト信シテ毫モ疑ハ

サリシニ比ヘテ格別ノ差違ナシト謂ハサルヲ得ス誠ニ歎

息ノ至リナラスヤ而シテ此理論ノ久シク世ニ行ハレタル

所以ハ是レ一ハ他ニ之ニ代フルヘキ理論ナカリシト一ハ

生物種類ノ形狀ハ千萬不易ノモノナリ造化ノ手ヲ離レシ  
以來寸分毫釐モ其姿容ヲ改メサルモノナリトノ信用カ念  
頭ヲ去ラサリシトノ二件ニヨレリ然レトモ「ダルウ井ン」  
氏世ニ出テ終ニ此迷霧ヲ一掃セリ (以下次號)

羅馬盛衰論

緒論

木内重四郎

羅馬素ト武ヲ以テ國ヲ建ツ其民堅忍不拔挫敗ニ逢フテ愈  
振ヒ受國ノ義氣殊ニ旺ナリ是ヲ以テタイベル河畔ノ一衆  
落ニ起リテ漸ク四隣ヲ併呑シ地ヲ三大洲ニ拓キ遂ニ前古  
未曾有ノ大國ヲ成スニ至レリ然レモ内訌外戰ノ相踵グヤ  
其弊遂ニ中等民ノ殄滅ヲ致シ財產ハ悉ク豪族ノ享有ニ歸  
シ以太里ノ全土奴隸人ノ閭巷トナルニ至レリ加之疆ヲ東  
方ニ拓クヤ其濫縱奢侈ノ俗ニ倣ヒ古代ノ美風地ヲ掃テ去  
リ廉耻報國ノ元氣ハ全ク消耗シ終ニ一君ノ獨裁ニ由ラズ  
ンバ復タ國安ヲ保ツアタハザルニ至レリ是ニ於テカ羅馬  
既ニ滅ビタリト謂ツベシ若夫帝國ハ精神ナキノ木偶界ニ  
シテ肺腑業已ニ朽腐セリ所謂生氣アルノ羅馬國ハ逝テ復



跡ナキアリ予今羅馬盛衰ヲ論スルニ方リ筆ヲ創建ニ起シテアウガスタスニ絶ツ者ハ微意此ニ在リテ存スレバナ

羅馬盛衰論目次提要

第一章 羅馬人ノ風俗慣習

- (一) 羅馬ノ諸神ハ單純ニシテ羅馬人ノ氣象ニ類スル事
- (二) 祖先ヲ懷フノ念厚キ事 (三) 貴族平民ハ人爵ノ區別ノミナラズシテ二派ノ政黨タル事 (四) 憲法ノ事並ニ愛國者多キ事 (五) 兩族ノ利ヲ共ニセシハ侵略ニ在ル事
- (六) 田園ヲ欲スルノ念熾ナル事並ニ農ヲ重スル事 (七) 農民ナルガ爲戰鬪ニ適セシ事

第二章 外部ノ隆盛

- (八) 羅馬ハ往古ヨリ武ヲ以テ國ヲ成セシ事并ニ國民ノ性質ハ其盛大ヲ致スノ一大原因ナリシ事 (九) 二黨ノ紛争止ミシ事 (十) 隕裂ハ外戰ノ爲一時伏匿セシ事 (十一) 近隣ヲ蠶食スル事 (十二) 第一「ピニツク」戰并ニ郡縣ノ制ヲ設ケシ事 (十三) ハンニバル戰并ニ羅馬ノ大國トナル前兆 (十四) 東方諸國ヲ略セシ事 (十五) 敵人ヲ酷遇

スルノ例并ニ羅馬人ノ思想 (十六) 希臘叛亂及鎮定ノ事

第三章 内部ノ壞亂

- (十七) 愛國心衰ヘ私利心熾ニナリシ事 (十八) 英氣ヲ文學技藝ニ用井ザリシ事 (十九) 郡縣ノ政令并ニ收稅官ノ事 (廿) 非道ノ富ヲ重子シ結果并ニ東方奢侈ノ風ヲ模倣セシ事 (廿一) 地方ノ狀態 (廿二) 大グラカスノ事并ニ代議制度ノ設ナキハ缺典ナリシ事 (廿三) 大グラカス以後隕裂四出ナル事 (廿四) マリアスサラノ殘殺 (廿五) サラノ事業 (廿六) 羅馬人ノ豪放ナル事 (廿七) 放逸奢靡ノ甚シキ事 (廿八) 撰舉并ニ諸官ノ壞廢 (廿九) ポンペー—ザル兩雄ノ争 (三十) 民政憲法ヲ保續スルアタハザル事 (卅一) シセロカト—ブルタス輩ノ卑見 (卅二) 帝國ノ基業立ツ事

第一章 羅馬人ノ風俗慣習

- (一) 宗教ノ變遷ハ恒ニ人知ノ進化ト相隨フ蓋宗教ハ人心ニ發シテ當時ニ行ハル、者ナレバ苟モ之ガ性質ヲ明ラムルハ以テ當時ノ世態民情ヲ推度スベキナリ古代羅馬人ノ信奉セシ神祇ハ素樸沈着ニシテ宛モ羅馬人ノ氣象ヲ寫



ル前兆 (十四) 東方諸國ヲ略セシ事 (十五) 敵人ヲ酷遇

ノ信奉セシ神祇ハ素樸沈着ニシテ宛モ羅馬人ノ氣象ヲ寫

セル者ニ似タリ若夫人心ヲ感化シ風俗ヲ維持スルニ於テハ宗教與カリテ大ニ力アリシナリ (二) 元來羅馬人ハ剛毅不拔ノ氣象ニ富ミ祖先ヲ敬スルノ念殊ニ厚シ彼ノブルタスガ市民ノ匿書ヲ得テ乃祖ノ民政ヲ創セシヲ想起シシザルヲ刺スノ意ヲ決セシガ如キハ能ク其民情ヲ寫セル者ト謂ツベシ (三) 貴族平民ノ別ハ惟リ人爵ノ階級ニアラズシテ實ニ政事ノ休戚ヲ異ニセルニ派ノ政黨ナリ或ハ「ホーラム」ニ於テシ或ハ議堂ニ於テシテ兩黨互ニ輸贏ヲ較シ雄長ヲ爭ヘリ (四) 羅馬人ハ着實ニシテ事情ニ愷切ナリ是ヲ以テ其憲法ヲ制スルヤ簡易ニシテ文具ニ失セズ務メテ輕便ヲ主トス夫ノ「トリビューン」官ノ若キ眞ニ當時ニ適切ナル者ニシテ正士タイベリアスグラカスノ若キ人ヲ以テ之ニ任ゼシメバ國家永ク昇平ヲ樂ムベキナリ「センソル」ニシクテ「トル」等ノ官職ハ皆羅馬人政治思想ノ創制セシ所ニシテ一モ緊要ニ非ルハナシ蓋其國憲ノ簡易適切ナリシモノ其隆盛ヲ致スノ一大原因タリシハ亦疑フベカラザルナリ總シテ才行兼備報國純忠ナル豪傑ノ輩出セシハ列國史乘罕ニ其比ヲ見ル所ナリ (五) 貴族平民ニ黨

ノ共ニ以テ利トスル所ノ者ハ侵畧ノ一事是ナリ兩黨均シク捕獲ヲ利セント欲スレト毎ニ貴族ノ壟斷スル所トナレリ (六) 羅馬固ヨリ愛國ノ義士多ク公益ノ爲ニハ私利ヲ顧ミザル者ナカラズト雖抑亦貨財ヲ愛スルハ羅馬人固有ノ性質ニシテ殊ニ田園ヲ貪レリ蓋亦故ナキニアラズ羅馬素ト農ヲ重シテ有名ナル閥閥フ「ピアス」レンタラスピツ等ノ稱號ハ稼穡蔬菜ノ名辭ニ出ヅルコト猶希臘人著名ノ佳號ハ多ク鬼神精靈ニ關係アルガゴトクナリ夫ノ有名ナル羅馬法律ノ若キモ其發生ノ際ニ在リテハ田法最主要ノ者ナリケリ以テ田園ヲ利トスルノ偶然ニアラザルヲ知ルベシ (七) 羅馬人ハ農耕ニ從事シテ風雨ニ櫛沐シ故ニ其出デ、戰陣ニ臨ムヤ能ク艱苦ニ耐ヘ向フ所風靡セザルハナカリケリ

第二章 外部ノ隆盛

(八) 羅馬ハ創建ヨリ武ヲ以テ國ヲ成シ恒ニ戰鬥ニ從事セリ國民ノ賦性堅忍不拔舉措沈重歩序アリ進デ止マラズ苟モ機會ノ乘ズベキアレハ之ヲ失フナク窘窮ニ居リテ屈セズ挫敗ニ逢フテ愈振フ是ヲ以テ遂ニ克ク振古未曾有ノ疆



域ヲ拓クニ至レリ人ヨク此ニ察スレバ他日ノ盛大ヲ致ス者深ク怪ムニ足ラザルナリ (九) 凡人内ニ腹心ノ疾アレバ大ニ其力ヲ外ニ用井ルアタハズト雖若シ内患ニシテ一朝快愈スルハ四支ノ活動モ一層其敏捷ヲ見ルモノナリ此時ニ方リ羅馬平民ハ稍ク參政ノ權ヲ得テ貴族對等ノ位置ヲ占メ肅牆ノ爭方ニ解ルガ爲ニ外ニ向フノ銳鋒殊ニ當ルベカラズ蓋貴族平民ノ別アル其由テ來ル所ハ遠ク建國ノ日ニ在リ當時羅馬良民ノ外更ニ奴隸及外邦移民アリ而其政務ハ全ク良民ノ專ニスル所ニシテ奴隸及移民ハ國民ト稱スルヲ得ザリシガ歲月ヲ經ルニ從ヒ此輩ノ子孫繁衍スルニ及ビ竟ニ之ヲ稱シテ平民トシ以テ新來ノ移民捕虜ニ別チ從來ノ良民ヲ呼テ貴族トセリ是ヨリ後貴族ハ常ニ舊制ヲ墨守シテ政權ヲ專有セントシ平民ハ進テ之ニ參與セントシ紛爭絶ヘズ羅馬ノ慘狀是ヨリ甚シキハナカリシガ今ヤ内難始メテ定マリカヲ侵略ニ專ニスルヲ得ルニ至レリ是レ實ニ羅馬ノ隆盛ヲ致スノ一大原因ト謂ハザルベカラズ (十) 然レドモ兩族ヲ結合スル真正ノ基礎未ダ確立セザルガ故ニ赫々タル戰勝ノ一時親和ヲ脩飾スルアル

モ早晚墮裂ノ變アルハ亦免ルベカラザル數ナルノミ (十一) 羅馬人ノ勇敢其レ既ニ斯クノ若シ是ノ故ニ能ク之ヲ用テレシナムヲ併吞シ之ヲ用テサバインスヲ戡定シ之ヲ用テエトラリヤ聯邦ノ盟主トナリ之ヲ用テサンパニヤノ領主トナリ遂ニサムナイト人種ヲアーペンナイン山ニ敗リアドリヤチツクノ濱ニ屠レリ今ヤ目ヲ南部マクナグレシヤニ遊シピラスト雄長ヲ爭フニ至レリ初メ羅馬人一タビ敗走スト雖遂ニ大ニ之ニ克テリ (十二) 夫レ禍端相連ナルモノハ戰爭ノ常ニシテピラス敗レテ後シ、リ、嶋ニ在ルシラカス人ハ援ヲカルセージニ乞フテ以テ自ラ防レリシラカスノ敵シ、リ、嶋ニ在ル者乃チ羅馬人ニ籍リテ之ヲ苦メントス是ニ於テ羅馬カルセージ兩國ノ大戰トナル所謂第一「ピューニツク」戰是ナリ羅馬ノ大敵ニ當ルハ實ニ是ヲ以テ初トス羅馬遂ニ勝利ヲ得テシ、リ、嶋ニサルシニヤニ島ヲ併セ更ニサルペンゴールヲ略シ威名地中海ニ振ヘリ乃チシ、リ、嶋ヲ以テ郡縣トシ太守ヲ遣リテ之ヲ治メシム從來羅馬ガ他ノ都邑ヲ下スヤ悉ク之ヲ羅馬ニ隸シ和戰ノ大權ヲ中央政府ニ收メ内治ノ庶政ハ其爲

ス所ニ任セシガ是ニ至リ始メテ太守派遣ノ制ヲ創セリ

草芥ノゴトク毫モ愛闕ノ意ナキナリ (十六) 當寺帝繼者



立セザルガ故ニ赫々タル戰勝ノ一時親和ヲ脩飾スルアル

馬ニ隸シ和戰ノ大權ヲ中央政府ニ收メ内治ノ庶政ハ其爲

ス所ニ任セシガ是ニ至リ始メテ太守派遣ノ制ヲ創セリ

(十三)尋テ長將ハシニバル大學シテ以太里ニ侵入スルニ

及ビ第二「ピューニク」戰起ル此苦戰ニ於テ羅馬遂ニ滅ビ

ズ能クカルセージニ克チシカハ是ニ於テカ字内ノ霸權ハ

羅馬ニ歸シ諸國其社稷ヲ失フニ至ルベキハ知者ヲ待テ後

知ラザルナリ (十四)是ヨリ以降羅馬ハ降者ヲ愛撫シ雌

伏者ヲ寬待セリ蓋窮寇ノ慮ルベキハ勢ノ然ラシムル所ニ

シテ羅馬驟ニ之ヲ殲スコトヲ得ザレハナリ尋テ希臘ヲ定

メマセドニヤヲ平ゲシリヤ王安チオカスヲ破リ小亞細

亞ヲ略セリ嗟人孰レカシーザルノルビコンヲ涉ルヲ以テ

野心トナスヤ羅馬ノ蠶食輟マザルモノハ是豈ニ野心ナラ

ザルヲ得ン耶抑亦國家ト私人トハ理論二種ノ別アル耶

(十五)羅馬人が己ニ抗敵スル者ヲ怨テ之ヲ酷遇スルノ例

ハカルセージノ陷落ニ於テカ之ヲ見ルナリ第三「ピューニ

ク」戰ニ克ツヤ其都城ヲ屠リ婦女童幼ヲ收メテ臣妾トシ

生靈七十萬ヲ鑿殺セリ而之ガ將帥タル者ハ則所謂温良ナ

ルシビオナリ蓋羅馬人ノ眼中自國ノ外ニ一物ナク苟モ事

ノ國家ノ安危ニ關スル者アルハ外人ノ生命ヲ視ル宛モ

草芥ノゴトク毫モ愛憫ノ意ナキナリ (十六)當時希臘諸

邦ハ羅馬ノ羈絆ヲ脱センコトヲ圖リアケーヤ同盟ヲ結テ

羅馬ニ抗シ恢復ヲ謀ルト雖時機ハ業己ニ去リ合縱ノ軍破

レテ希臘ハ郡縣トナリ往時隆盛ノ日ニ成レル古器珍玩多

クハ兵燹ニ罹リケリ

第三章 内部ノ壞亂

(十七)孟軻氏云ヘルアリ内憂外患ナキ者ハ國恒ニ亡ブト

予今羅馬國ニ於テカ之ヲ見ルナリ蓋愛國ノ義氣ナル者モ

生存競争上必然ノ理ヨリ發生スルモノニシテ其争フ所ナ

クンバ愛國心獨リ徒存スルコトヲ得ズ若夫艱難ニ成リテ

安佚ニ敗ルハ固ヨリ怪ムニ足ラザルナリ此時ニ方リ羅

馬既ニ基布ノ諸邦ヲ平ゲ外慮ルベキ者ナキガ爲ニ愛國ノ

義氣稍ク銷滅シテ安居營利ノ私心惟リ熾ナルニ至レル者

是レ勢ノ然ラザルヲ得ザル者アルナリ (十八)加之戰勝

後鬱勃拊脾ノ精神用井ルニ所ナク彼ノ希臘人ノ如ク心ヲ

徒シテ之ヲ文學技藝ニ致スモノナキガ爲利劍將ニ鏘シテ

英氣稍ク衰エントセリ (十九)郡縣ノ政令ハ太守ノ專任

スル所ニシテ壓制ヲ以テ下ヲ御シ苞苴公行シ又收稅官ハ



收歛ヲ極メ唯私利是レ汲々トシテ嘗テ愛憐ノ心ナシ

(廿)羅馬既ニ斯クノ若ク其道ニ由ラズシテ巨萬ノ財ヲ重  
ヌルガ上ニ東方淫縱奢侈ノ風ヲ倣ヒ靡然トシテ能ク禁ズ  
ルナシ (廿一)羅馬府郊外往時多少ノ田園ヲ有シ生ヲ樂  
ミ國ヲ愛セシ小農今ヤ全ク殄滅シテ跡ヲ留メズ山野悉ク  
富人ノ莊園トナリ過半ハ牧場ニ變ジ其奴隸ヲシテ之ヲ監  
視セシメ又屢爭亂ヲ經テ以太里全州到ル所荒蕪ノ曠野ニ  
化シ嘗テ羅馬人ノ以テ誇リシ耕耘モ衰頽シテ今ハ其食料  
ニ究シ每歲供給ヲ他ノ郡縣ニ仰グニ至レリ故ニ屢公廩ヲ  
開キテ貧民ヲ賑ハス狡智ノ富人ハ更ニ觀劇ヲ設ケテ愚民  
ヲ悅バシメ以テ漁人ノ利ヲ謀レリ又郡縣一般厚歛ノ爲ニ  
究乏シ人口漸ク減少セリ殊ニ其郡邑輸スベキノ租額一定  
シ課丁ノ人口年ニ減ズレモ全邑ノ租額每ニ變ズルナシ加  
之兵亂ハ田園ヲ荒廢シ人復タ銳意皆殖ニ從事スルナシ且  
伊太里希臘西班牙等ノ郡縣ヲ驅リテエヂプトリビヤシ、  
リ等膏腴ノ穀產地ト競争セシメケレバ稼穡ノ道全ク廢  
レ田園悉變ジテ牧場トナレリ斯ク窮苦ニ降リシ人民ハ僻  
阪ノ墳墓ヲ辭シ本業ヲ廢シ來テ畿甸ニ混入シ榮華ニ沈溺

セル都風ニ呼吸シテ餘生ヲ送ルヲ務メケリ (十二)此時

ニ方リ正士タイベリアスグラスカハ人民ノ疾苦ヲ傍觀ス  
ルニ忍ビズ以太里全州民ニ與フルニ良民權ヲ以テセンコ  
トヲ主張セリ是レ實ニ濟時ノ急務ニシテ元來疆域彼ガ若  
ク廣大ナルニ尙一羅馬府ヲ以テ之ヲ統御セントスルハ能  
ハザルノ事業ノミ然レドモ豪族ハ唯慾海ニ沈沒シテ矇眼  
ヲ開クニ由ナク頑然其言ヲ容レズグラスカス遂ニ難ニ斃ル  
嗚呼グラスカスノ若キハ公明正大光ヲ日月ト爭フ者ト謂ツ  
ベシ不幸ニシテ貪婪無饜ナル豪族ノ毒手ニ罹リテ死ス抑  
亦羅馬民政ノ不幸ト謂ツベキノミ蓋羅馬素ト元老院及民  
會アリテ立法ノ大權常ニ人民ニ在リ其一小都府タルノ間  
ハ則可ナリト雖宇内ヲ包括スルノ日ニ及ビテ尙舊制ヲ墨  
守セントセバ天下ノ大事ハ羅馬市井ノ狡漢ト近郊ノ愚民  
トノ裁決ニ出ヅルニ至ル是ヲ以テ後世ニ及ビテハ大權ヲ  
舉ゲテ之ヲ元老院ニ收メ民會ハ唯名ノミヲ存セシメケレ  
ドモ澆季ノ世豈ニ惟リ元老院ノ壞廢セザルヲ望ムベケン  
ヤ是故ニ大奸巨猾出デ、以テ大權ヲ攘竊スルヲ馴致ス當  
時若シ能ク代議ノ制ヲ設ケテ之ヲ利用スルヲ知ラバ羅馬

ノ民政ハ帝政武斷ノ不幸ニ陷ルヲ免ルベカリシニ其然ラ

トス羅馬ノ存亡實ニ風前ノ燈火ニ異ナラズ人心恟々ハン



阪ノ墳墓ヲ辭シ本業ヲ廢シ來テ畿甸ニ混入シ榮華ニ沈溺

時若シ能ク代議ノ制ヲ設ケテ之ヲ利用スルヲ知ラハ羅馬

ノ民政ハ帝政武斷ノ不幸ニ陷ルヲ免ルベカリシニ其然ラザリシ者ハ實ニ是非ナキ事ニゾアリケル (廿三) 大グラカスノ死後爭論已マズ甲黨乙派迭ニ隆替シ一ハ國憲維持ヲ名トシ一ハ濟時利民ヲ口ニスルモ俱ニ是レ鳥ノ雌雄ヲ評スル者ニシテ至誠國家ヲ愛スルノ義士ハ復タ出デザルナリ小グラカス乃兄ノ遺志ヲ承ギテ民權ヲ主張スト雖賢士シビオヲ暗殺セシ如キハ乃兄ノ正大ニ耻ヅル遠シト謂ツベシ若人ニシテ猶且然リ餘ハ以テ想見スベキノミ (二十四) 爾後刃傷毒殺互ニ相害シテ羅馬府遂ニ大ニ亂レマリアスサラノ腥風血雨ヲ見ルニ至レリマリアスハ殘暴搏虎ノ豪ニシテサラハ陰險酷薄ノ雄ナリ此輩ノ能ク一時ヲ制シテ董卓曹操ノ暴ヲ遂グルヲ得シ所以ノ者ハ蓋偉勲ノ人目ヲ眩惑スル者アリシヲ以テナリマリアス身寒微ニ起リキムブリ―チユートンスノ胡兵入寇スルニ方リ兵ニ將トシ討テ之ヲ却ケ羅馬ノ危急ヲ救ヒ蠻民ノ覬覦ヲ杜絶セシハ是レ其一時民心ヲ得シ所以ナリ (廿五) 此時ニ方リ

トス羅馬ノ存亡實ニ風前ノ燈火ニ異ナラズ人心恟々ハンニバル以後斯クノ若キハ未ダ曾テアラザリシ所ナリ而サラハ遂ニ能ク之ヲ征服シ凱旋ノ日一舉シテ私讎政敵ヲ誅盡シ大權ヲ掌握セリ獨リ怪ムベキハ幾モナク忽焉勇退シテ風月ヲ樂ムモノ亦以テ羅馬男兒ノ遺風ヲ存セル者ト謂フベキナリ (廿六) 凡ソ羅馬人ノ殘暴ナルハ後人ヲシテ戰慄セシムト雖抑亦其間自ラ豪傑ノ風致ヲ存シ讚嘆セザラント欲スト雖得ザルナリ (廿七) 其豪放既ニ斯クノ若シ是ヲ以テ其風俗ノ壞廢スルニ及ビ奢靡モ亦太甚シク其淫縱度ナキニ至テハ彼ノ希臘ノ季世澆季ノ風俗ノ如キモ羅馬ニ比スレバ未ダ閻闔ノ堂ニ登ラザル者ト稱スベキノミ (廿八) 當時撰擧ノ方亂レテ賄賂公行權謀至ラザルナク公會ノ討議ハ腕力ヲ以テ輸贏ヲ決シ人民ノ保護者タルベキトトリビューンハ苞苴ヲ貪リテ威權ヲ弄シ「コンソル」ノ印綬ハ常ニ兵權アル者ノ帶ブル所トナリ嘗テ尊嚴犯スベカラザリシ元老院モ一二奸雄ノ指顧ヲ仰ギテ復タ爲ス所ナキニ至レリ (廿九) サラノ後ニ起レル爭亂ハ即有名ナルポンペーシ―ザル兩雄ノ爭奪ニシテポンペーハ元老

ポンタス王ミスリデーツ大擧シテ羅馬ニ抗シ東コーカサ

スヨリ西アルプスニ亘ルノ地悉ク合縱シテ羅馬ヲ覆サン



院ヲ挾ミ國憲ヲ負ヒシ—ザルハ兵威ニ藉リ智略ヲ恃ミ羅馬ノ州郡東西二軍ニ分屬ス近ク之ヲ譬フレバ甲越ノ兩雄百戰ノ精兵ヲ率ヒ畢生ノ智術ヲ盡シ霸ヲ信陽ニ爭フ如キ

ナリ然レモポンペ—ノ器謙信ニ若カズシ—ザルノ略信玄

ニ勝ル數等ナルガ故ニ一戰ニシテ天下ノ向背ヲ決シシ—

ザル遂ニ羅馬ノ主宰トナレリ (三十)羅馬ノ民政斯ニ倒

レテ未曾有ノ大國一個人ノ私有ニ歸セシ者ハ必然ノ理ア

リテ存スレバナリ毫モ怪ムニ足ラザルナリ又悲ムヲ要非

ザルナリ(卅一)シ—ザル人ト爲リ英邁不羈文ニ長シ武ニ

精シク不世出ノ才ナリシガ王位ヲ覬覦スルノ嫌ニ因リ義

俠ブルタスノ手劔ニ死セリ蓋羅馬ノ愛國者シセロカト—

ブルタス輩ハ社稷傾覆ノ罪ヲ一個人ニ歸シテ謂ラクシ

—ザル微セバ民政ハ滅ビザルナリト安ソ知ラン民政壞

廢ハ一專制者ヲ待ツ既ニ久シクシテ百シ—ザルヲ刺スモ

帝政ノ竟ニ己ムベカラザルコトヲ至公ノ炯眼ヲ以テ之ヲ

觀レバシ—ザル實ニ正道ヲ履ミタリト謂ツベシ蓋兵力ハ

實ニ當時ヲ安ンズルノ要具ニシテシ—ザル之ガ準備ヲナ

シタレバナリ (卅二)シ—ザル死シテ羅馬復ビ亂レシガ

シ—ザルノ甥オクタビアス叔父ノ遺兵ヲ率井テ禍亂ヲ戡定シ羅馬帝國ノ基ヲ創シ國民竟ニ承平ト羈絆トヲ樂ムニ至レリ

結論

此ニ由リテ之ヲ觀レバ羅馬ノ由テ以テ興リシ所ノ者之ヲ

三大因ニ歸セズンハアラズ一ニ曰ク羅馬人愛國ノ義氣ヲ

固有セル事二ニ曰ク憲法ノ簡易ニシテ事情ニ適切ナリシ

事三ニ曰ク貴族平民ノ區別滅ビテ內顧ノ患止ミシ事而其

衰亡ヲ招ギシ所ノ者モ亦三大因ニ由ラズンハアラズ一ニ

曰ク報國純忠ノ美質ヲ失ヒ營利趨奢ノ私心熾ニナリシ事

二ニ曰ク憲法簡略ニシテ大國ヲ統轄スルニ足ラザリシ事

三ニ曰ク中等民殄ビテ貧富懸絶シ富人常ニ政ヲ恣ニシテ

下民ヲ虐ゲ能ク之ガ調和ヲ圖ル者ナキニ至リシ事是ナリ

夫レ上古開化ノ諸國嘗テ一タビハ羅馬ノ版圖ニ歸シ方今

文明ノ諸邦多クハ建國ヲ羅馬隕裂ノ後ニ起セバ吾人ノ當

ニ羅馬史ヲ講スベキハ固リ論ヲ俟タス殊ニ政體ノ變遷法

律兵制等ノ如キハ千載ノ龜鑑ニシテ其他正人義士亂臣賊

子ノ遭遇喜ブベク悲ムベキ者數フルニ遑アラズ故ニ世羅

馬史乘ヲ愛讀スル者ノ多キ固リ怪ムニ足ラザルナリ予嘗

想見ルベキナリ若夫三大洲ニ君臨スルノ日猶一都制度ヲ



シタレバナナリ (卅二) シーザル死シテ羅馬復ビ亂レシガ

子ノ遭遇喜ブベク悲ムベキ者數フルニ違アラズ故ニ世羅

馬史乘ヲ愛讀スル者ノ多キ固リ怪ムニ足ラザルナリ予嘗  
テ窃ニ謂ラク史ヲ讀ミテ英雄ノ興敗人生ノ禍福ヲ評スル  
ハ猶天下ヲ跋渉シテ江山ノ勝景ヲ探グルガゴトキナリ審  
ニ世態ノ變遷ヲ察シ密ニ盛衰ノ原因ヲ究ムルハ猶地圖ヲ  
繙キテ四海ノ形勢ヲ説クガゴトキナリ好景勝地固リ愛ス  
ベシト雖地理ヲ曉ズルニアラザレバ以テ實用ニ益スベカ  
ラザルナリ人若シ徒ニ羅馬史ノ多態喜ブベキヲ知リテ其  
由ル所ヲ講ゼズンバ則是レ所謂景物ノ役タルニ過ギザル  
ノミ蓋邦家ノ隆替ハ一朝一夕ノ故ニアラズ必ズヤ許多ノ  
原因アリ幾多ノ歲月ヲ待テ後始メテ之ヲ致スノミ而其所  
謂原因ナル者モ多クハ特殊ノ數因相結テ以テ結果ヲ來タ  
スモノニアラズシテ甲因ハ乙因ヲ起シ乙因又甲因ヲ動カ  
シ以テ因果ヲ相成ス予今羅馬衰盛ノ原因ヲ論シ各三個ノ  
大綱ヲ掲グト雖又細ニ之ヲ推究スレバ亦其由ル所ノ多岐  
ナラザルヲ知ラン蓋羅馬人固リ着實ニシテ自黨ヲ愛シ協  
心戮力ノ風ニ厚シ故ニ其制度ノ簡易ニシテ中央集權ノ政  
略ヲ執リシコトモ平民ノ進テ參政權ヲ要メ貴族對等ノ地  
位ヲ占メシコトモ一ニ羅馬人固有ノ性質ニ出デタルコト

想見ルベキナリ若夫三大洲ニ君臨スルノ日猶一都制度ヲ  
墨守シテ嘗テ變革ヲ謀ラザリシ者ハ羅馬人保守ノ資性之  
ヲシテ然ラシメシ所ナリ然而外慮ルベキノ敵ナク内讎フ  
ベカラザルノ富ヲ重ヌルニ及ビ愛國ノ氣衰エテ營利ノ說  
行ハレ稍ク奢侈ニ流レテ貧富ハ天地懸隔シ古代ノ美風ハ  
蕩然トシテ地ヲ掃フ者一二其大國ヲ成セルニ起原セズン  
バアラズ是ニ由リ之ヲ觀レバ羅馬最盛ノ日ハ則是レ羅馬  
衰頽ノ初期ナリト謂ツベシ是レ誠ニ必然免ルベカラザル  
ノ數ナルノミ史ヲ讀ム者其興亡ノ迹ヲ見テ徒ニ掩卷大息  
スルハ抑亦益ナキノミ然リト雖後人誠ニ能ク其國ヲ愛セ  
バ須ク往ヲ鑑ミテ來ヲ察シ自國ノ隆替スル所以ヲ推究シ  
テ以テ其替フル所以ニ防ヘ其隆ナル所以ヲ務ムベシ時勢  
固リ一個人ヲ牽制スト雖一個人モ亦能ク時勢ヲ牽制スベ  
キナリ要スルニ唯患害ヲ初萌ニ察シ時ニ隨テ之ヲ防グニ  
在ルノミ思ハザルベケンヤ

譯文原語ヲ存スベシ 内 藤 耻 叟

西洋ノ書ヲ譯スルニ其事物名目ノ成語ニ至リテ漢字及ヒ



我本邦語ヲ代用スル者往々其原語ノ意義ヲ誤マリ大ニ後學ヲ惑シムル者アリ是西洋成語熟字ノ意義ハ元來支那ノ字義及ヒ本邦ノ語トハ太々異ナルモノアルヲ強テ之ヲ換用セントスルニヨレリ」因テ惟フニ西洋ノ熟字成語及ヒ事物名目等ハ可成的其原語ヲ存シ洋字ヲ以テ之ヲ書シ傍ラニ假名ヲ付ケ註ニ其義ヲ意譯シテ之ヲ曉リヤスカラシメバ此害少ナカルベシコレ譯者ノ學力膚淺ニシテ妄リニ漢語ヲ換用シテ大ニ學者ヲ誤ルノ害ヲ避ンカ爲也」且今後遠ク學者ノ利害ヲ謀ルニモ和漢西洋各其自國ノ原語ヲ存シテ世人ヲシテ之ヲ曉通セシメ其原字語脈ノ東西各別ナルコトヲ明白ニシラシメンコト讀書上ニ於テモ又内外交際上ニ於テモ尤便利ナルベシ」

但今ノ漢學者ナル人モ亦唐音唐語ニ通シテ常ニハ唐音ヲ以テ讀書セシムル様ニアリタシ世ニハ英學者ヲシテ英書ヲ讀ムニ專ラ和語ヲ以テセシメンコトヲ求ルノ論アリト云是不通ノ論ナラン

譬ヘバ今世ニ傳ル佛書中ニモ其本國ノ原語ヲ其儘ニ傳フル者少ナカラズ就中アミタ漢ノ無ヒルシヤナ漢ノ類今

モ其原音ヲ矢ハズ故ニアミタヒルシヤナトイヘバ蓋佛ノ本國人ニモ通ズベシ是其原語ヲ存シテ今ニ傳ルガ故ナラズヤ今彼ノカバンヲ譯シテ行囊トカアケニトカ和漢字ヲ換用シ世人之ヲ通用セバ學者ニハ便利ナルモ西人ニハ通用スベカラズ凡語言文字ハ字内ニヒロク通用シテコソ便利多ケレ一國ニハ便利ナルモ他ニ行ハザレバ不便利ナラシムル也ナドイヘル議論モアルベケレトモコレコソ世界ヲ大觀セザル井蛙ノ見ナリ却テ今後我道義學問ヲ世界ニ弘通セシメンガ爲ニモ世界普通ノ字語ヲシルコソ肝要ナルベキニ

但本文ノ如キハ内外ノ辨ヲ失ヒ我邦人ヲシテ彼ニ從ハシカレバ今後譯文ニ從フ人ハナルベキタケ原語ヲ存シテアマ子ク世人ニ耳慣レシメ妄リニ漢字ヲ代用シテ大ニ世人ヲ眩惑セシムルノ害ナカラシコトヲ希フナリ」今既ニ世上ニ行ハル、哲學統計又ハ自由民權ナドイヘル字面ノ如キモ蓋或ハ其原義ニ正當ナラザルノミナラズ之ヲ漢人ニ示サンニモ又其何事タルヤヲ解スベカラズ是世上ニ一種

妄濫不通ノ成語ヲ作り出シテ大ニ東西ノ人ヲ惑ストモ云

ルヲ得ス曰ク政府ハ豫メ萬般ノ事務上要スル所ノ費額ヲ



ル者少ナカラズ就中アミタ漢ノ無ヒルシヤナ漢ノ遍照ノ類今

示サンニモ又其何事タルヤヲ解スベカラズ是世上ニ一種

妄濫不通ノ成語ヲ作り出シテ大ニ東西ノ人ヲ惑ストモ云  
ベキ者也ア、世ニカ、ル怪シキ言語ヲ作り出サンヨリハ  
寧口原語ヲ存シテ世人ヲシテ夙ニ其意義ヲ曉ラシムルノ  
善ナルニハシカズナマナカニ不熟ノ漢字ヲ填ムルハ大害  
アリテ後來學問ノ爲ニ大ニ憂フベキコナリ深ク慮ルベキ  
コナラズヤ且兒童入學ノ初ニ於テハ漢字モ洋字モ共ニ解  
シカタク共ニコレ生熟ノ別アルニ非レバ其勞同シクバ不  
適當ノ漢語ヲ覺ンヨリハ初メヨリ洋語ヲ記臆シテ其語意  
ヲ曉リ居ラン方必後來ノ便益ナラン故ニ自後西書ヲ譯ス  
ル人ハ可成的此意ヲ以テ原語原字ヲ存セラレンコヲ希望  
スル也

○

財政ノ監督權ヲ論ス 長崎剛十郎

嚮ニ泰西ノ學我國ニ波及スルヤ新奇ヲ好ムノ徒歐米民權  
ノ盛ナルヲ賞シ國憲國會ノ必要ヲ説クヲ頻リナリ而シテ  
國會ノ權限中財政ノ監督ヲ以テ最要件ノ一トセリ曰ク被  
稅者タルモノハ國用ノ費途ヲ辨別セサルベカラス曰ク一  
切ノ租稅ハ被稅者ノ承諾アルニアラサレハ之レヲ徵收ス

ルヲ得ス曰ク政府ハ豫メ萬般ノ事務上要スル所ノ費額ヲ  
國會ニ報シ該會ノ議決ヲ經ルニアラサレハ一切ノ費用ヲ  
辨スルヲ得スト之レヲ主唱スルノ甚シキハ殆ト財政ノ監  
督ハ國會ノ監督即チ立法ノ監督ヲ措テ又他ナシト信スル  
者ニ似タリキ知ラス立法ノ監督ニ比スルニ更ニ緊要ナル  
財政上ノ監督ヲ要スルヲ今ヤ文運進捗又昔日ノ比ニアラ  
スト雖凡ソ財政上ニ涉ル事項ニ至リテハ能ク了解セサ  
ルモノ世又少シトセス因テ余今拙文ヲ願ミス聊カ國家會  
計ニ關スル諸般ノ監督權ヲ略述セント欲スルナリ  
夫レ國家會計ノ事タル國民休戚ノ關スル所ニシテ或ハ直  
接又ハ間接ニ之レヲ監督セサルベカラサルハ更ニ辨ヲ俟  
タサルナリ而シテ其監督法如何ニ至リテハ各國政体國情  
ノ異ナル固ヨリ同一ノ制ニ由ル能ハスト雖凡方今開明國  
ニ在リテハ概テ立法行政司法三權ノ監督ヲ行フ者トス  
立法ノ監督 立法ノ監督トハ即チ國會ノ監督ニシテ(第  
一)先ツ政府ノ要スル一般經費ノ豫算額及ヒ年度中ニ至  
リ補充費若クハ非常費トシテ増額ヲ議定スルニアリ蓋シ  
泰西慣習風俗ノ東洋ニ異ナル彼ノ土ニ於キテハ人民昔日



租稅徵收議決ノ權ヲ有セシカハ此權延ヒテ遂ニ經費ヲ調  
 査シ之レヲ議定スルノ權トナレリ而シテ經費ノ議定ハ各  
 國其方法ヲ異ニシ或ハ總額ニ由リ或ハ分科ノ法ヲ行ヒ而  
 シテ分科ノ程度ニ至リテハ或ハ章ニ由ルアリ或ハ科目ニ  
 由リ或ハ細科目ニ由ルト雖モ之レヲ要スルニ立法官ハ經  
 費ノ調査ヲ爲スニ當リテ當局者ニ比スルニ固ヨリ其精ヲ  
 得ル能ハサルカ故ニ余リ會計上ノ細目ニ干涉スヘカラス  
 之レニ反シ豫算ヲ調査スルニ及ヒテ議院ノ干涉甚シキモ  
 ハ行政ノ局面ニ當ル者ノ爲メニ謀ルニ其困難果シテ幾何  
 ツ哉英國ニ於キテ豫算議定ノ迅速ナル固ヨリ委員會會議法  
 凡テ財政ノ議題ニ關シテハ下院ノ委員ヲ分ツテ二トナス  
 支出委員(コンミテ、オフ、ソツプライ)收入委員(コンミ  
 テ、オフ、ウエース、ア、ソツプライ)然ラシムル所ナルベシト雖モ亦  
 内閣組織法ノ然ラシムル所ニアラサラン哉蓋シ英國ノ内  
 閣ハ彼ノばぢほつと氏カ英國憲法論ニ云ヘルカ如ク殆ト  
 議院委員ノ一種類ニシテ立法部行政部ヲシテ互ニ連結セ  
 シムル所ノ連鎖タリ而シテ其政務ヲ執ルノ間ハ下院議員  
 ノ大半之レニ充分ノ信用ヲ置キ宰相ハ一切政治上ノ責ニ  
 任スルヲ以テ政府ノ計畫スル豫算ニ至リテモ其精確ナル

ヲ信シ之レニ關シ發議スルモハ却テ宰相ノ責任ヲ輕減ス  
 ヘシト思フモノ、如シ是点ニ於キテハ英國制度ノ最モ優  
 美着實ナル所ナリトス  
 立法ノ監督 (第二)年度閉鎖ノ後ニ至リ果シテ各省廳長  
 官ハ議院ニ於キテ議決セシ費額ヲ確守セシヤ其費額ハ法  
 律ヲ以テ定メタル所ノ費途ニ充テシヤ否ヤヲ查定スルニ  
 アリ顯敏ナル行政家ハ能ク議員ノ胸裏ヲ算シ其冀望スル  
 事業ノ擴張ヲ名トシ多額ノ資金ヲ得ルノ後之レヲ他費  
 用ニ充テ議員ヲ欺クカ如キハ代議政體ノ國ニ於キテ往々  
 之レアルノ事跡ニシテ之レヲ防禦スルノ法又肝要ナリト  
 ス  
 司法ノ監督 白耳義荷蘭伊大利ノ如キ諸國ニ於キテ會計  
 檢査院ノ權力ノ過大ナル該院ノ承認ヲ得ルニアラサレハ  
 一切官金ノ支出ヲ爲ス能ハサルノ制アリ然レモ通常該院  
 ノ權力タル決シテ現年度ノ經費支出ニ關スヘキモノニア  
 ラズシテ只過年度取扱ノ形跡ニ就キテ調査スヘキモノタ  
 リ其目的タルヤ會計官吏ノ行爲果シテ法規ニ違背セサル  
 ヤ否ヤヲ查定シ若シ法規ニ違背スルナクンバ其責任ヲ解

キ過失ニ由リテ違背シタルモハ其責ニ任シテ不足ヲ償ナ

少モ決行ノ權力アルヲ見ス此レ等ノ權力ニ至リテハ多ク



任スルヲ以テ政府ノ計畫スル豫算ニ至リテモ其精確ナル

ヤ否ヤヲ査定シ若シ法規ニ違背スルナクンハ其責任ヲ解

キ過失ニ由リテ違背シタルハ其責ニ任シテ不足ヲ償ナ  
 ハシメ其所業正シカラサルハ之レヲ糾彈スルニアリ由  
 是觀之ハ會計検査院ハ會計ノ判決ヲ宣告スルノ權ヲ有  
 シ所謂司法ノ監督ヲ行フ者ナリ佛國ニ於キテハ千八百七  
 年なほれれん第一世ノ創立スル所ニシテ純然タル法廷ナ  
 リ其目的タル亦上ニ陳セシ所ニ外ナラス而シテ該院ハ檢  
 査官(コンセーユ、メートル)検査官補(コンセーユ、レフ  
 エレンデール)検査官候補(オーヂュール)ヨリ成リ其他  
 檢事數名之レニ附屬ス此レ等ノ官吏ハ大統領ノ命スル所  
 ニシテ検査官候補ヲ除クノ外ハ皆終身官トス白耳義荷蘭  
 ノ如キ検査院ノ官吏ヲ任用スルニ下院ノ撰擧ニ由ルアリ  
 噍國ノ如キ下院ノ呈出セシ姓名簿ニ由リ國皇之レヲ命ス  
 ルアリ英國ニ於キテモ國皇ノ特ニ命スル所トス  
 検査院ノ權限組織タル大略斯クノ如シ佛國ニ於キテハ尙  
 ホ市邑ノ會計官ニシテ縣參事院ノ裁判ヲ仰キシモノ、控  
 訴ヲ受クル所ノ法廷トナリ其他一般財政ノ管理上ニ就キ  
 テ助言報告等ヲ爲シ稍々調査院ニ相似タルノ資格ヲ帶フ  
 ルモノ、如シト雖トモ是レ只其自論ヲ陳スルニ止マリ些

少モ決行ノ權力アルヲ見ス此レ等ノ權力ニ至リテハ多ク  
 之レヲ行政上ノ監督ニ讓レリ而シテ會計検査院ノ措置法  
 規ニ則トラス會計官ニシテ該院ノ判決ニ服セサルキトハ  
 參事院ノ裁定ヲ請フモノトス  
 今此レ等ノ監督ヲ比較スルニ立法官ハ各省廳長官ハ果シ  
 テ議院議決ニ反セサルヤ否ヤヲ査定スルモノニシテ其監  
 督獨リ支出命令官ニ及フベクシテ會計官ニ及ハス然ルニ  
 司法ノ監督タル全ク之レニ反シ獨リ會計官ニ及ヒ支出命  
 令官ニ及ハス然リ而シテ支出命令官及ヒ會計官兩ナカラ  
 共ニ之レヲ監督スル所ノモノハ獨リ行政ノ監督之レアル  
 ノミ  
 行政ノ監督 會計統轄ノ必要ナル佛國ノ學者ぼりゆー氏  
 財政論ニ曰ク「財務集權ノ大利タルヤ財政ノ秩序ヲ整へ  
 規律ヲ正スニアリ加之ナラス財務ノ機關ヲ簡約ニシ國用  
 ノ節省ヲ來セシコ少ナカラス」ト蓋シ佛國ニ於テハ戰亂  
 相續キ傑相好吏私慾ヲ逞ウシ一タヒ財政ヲ亂セシカハ後  
 テ大ニ之レカ改良ニ注目セシニ由ル乎佛國會計法ノ整頓  
 スル財政機關ノ備具スル殆ト他ニ比類ヲ見サルナリ王政



復古ノ時ニ當リテ務メテカヲ財政上ノ弊害ヲ矯正スルノ道ニ盡シ遂ニ大藏省中ヲ、テレクシオン、デ、ラ、コンタビリテ、ゼ子ラール即テ調査局ナルモノヲ設ケ各省廳一切ノ會計ヲ總理スルノ局トナセリ其權限ノ大ナル該局ニ於キテ制定スル所ノ規律ハ一切ノ會計上ニ施行スベキ者ニシテ會計萬般ノ事務ハ皆均シク會計調査官ノ監督ニ歸スヘキ者トセリ是ニ於キテ乎各省會計ノ獨立ヨリ生スル所ノ弊害ヲ芟除スルニ至ル是レ則チ行政ノ監督ニシテ上來陳セシ所ノ監督ニ比スルニ一層緊要ナルヲ見ル凡ソ法規ヲ犯セシ所ノ形跡ヲ審査スルハ常ニ之レヲ犯サ、ルヤウ注意セシムルノ良キニ如カサルナリ

佛國行政監督ノ法ニ様アリ一ハ調査局ノ斷ヘス會計官ノ所爲ニ注目シ之ヲシテ會計ノ規律ヲ邊奉セシムルニアリ一ハ一定ノ時期ニ於キテ行フモノナリ而シテ其方法亦ニアリ一ハ毎年各省過年度ノ精算ヲ以テ特別委員ノ調査ニ附ス其委員タル者ハ上下院參事院會計検査院ヨリ撰定セシモノヲ以テ成リ一ハ會計調査官ノ監督ニシテ專ラ會計官ヲ監督スルモノナリ

以上會計ノ監督ニ就キテ論スルコト斯ノ如クニシテ現今文明國殊ニ佛國ノ會計上ニ注意スルコト最モ至レリト云フベシ今茲ニ之ヲ略陳センニ立法ノ監督ハ經費ノ費途ヲ明カニシ以テ有司ノ專横ヲ防キ行政ノ監督ハ會計上ノ規律ヲ嚴ニシ以テ支出命令官會計官ノ所業ヲ正シ而シテ司法ノ監督ハ會計官ノ責ヲ負ハシムルモノナリ以上三權ノ監督アリ始メテ財政ノ監督備ハルモノトス而シテ行政ノ監督ニ至リテハ余ハ斷シテ三權中最モ要用ナルモノナリト云ハンノミ

本邦夙ニ會計ノ監督スベキヲ看破シ已ニ調査局検査院ノ設ケアリ其權限等ニ至リテハ余其詳細ヲ窺フヲ得スト雖田或ハ以上論セシ佛國流ノ行政司法ノ監督ニ類似タルニ庶幾ラン平然リ而シテ立法ノ監督ニ至リテハ今後如何ナル權力ノ發生スヘキヤ余ノ敢テ知り得ヘキ限リニアラサル也

理醫學講談會筆記

地球の位置(前號の續き)



寺尾壽君講談

林茂淳君筆記

今まで申したことをつづめて申しますと大陽は大きい熱い明るい玉で其ぐるりを惑星といふ世界が回つて居る或は遠く或は近く或は遅く或は早く運動しますがいづれも自分で熱や光りを持たない皆大陽から仕送りとして貰つて居るのです例へば大陽は一軒の主であつてあとのものゝ其の子供だとすれば月は地球の眷屬で大陽の孫であります地球の外にも眷屬を持た惑星があるかといふに随分ある先づ第一に火星には二つほど眷屬がある二つほど月を見たようなものがある其れは衛星と言ひますこれは近頃あめりかのわしんどの天象臺の教師あざふ、ほれるといふ人が発見いたしました次に木星にハ月の様なものが四つゝいて居る望遠鏡で木星を見ますとどんなげちな望遠鏡でも星の眞中の所に筋の様なものが見えます丸に一文字の紋所とでもいふべき形に見えます此筋と同じ向よ彼の四の衛星が時としては玉を並べたやうに四つとも一直線に見えます其の次ぎにハ土星これハ餘程贅澤な星

て(聽衆笑を含む)八つほど眷屬を引きつれて居ります次に天王星海王星これにも眷屬ハ澤山あります天王星に四つ海王星に一つ之か見へません大陽の親父をやじで惑星は子衛星ハ孫であります其の中で地球は第何番の子たといふこともしれました此の家内のことと總稱して大陽系と言ひます系ハ系圖の系の字でありまして私が親子眷屬に譬へましたのは決して無理では無い他人ひとが大陽系と付けましたのも私の言つた通りの譯柄だからでありますさてこれですつと前にいひました地球ハ何の中であるかといふ問に對して大陽系の中である地球ハ大陽の眷屬の一人であるといふ答へが出来ました此れから先きがむつかしくなる大陽系ハ何の中かと言ひますに先づ第一に我々の地球なごに比べると夥しい大いものであります矢張り近所に同士があるであらうかまるで世界の中に孤立して居て外ハ黨類ハあるまいかといふに天の中には日と月と惑星と其の外に星といふものがある先づ星といふものハ大事のもので天文學のことを星學といふ位でありますから星



のことを言はなければなりませんさて星が我々の太陽の様なものでなからうかといふ疑ひが起るこれは誰れでもかう疑ふとです（尤も此の誰れでもどの學者でもといふことであります）學者の目から見ると惑星が地球の黨類であると同様に星が太陽の黨類ではあるまいかと考へます併し白徒シロトの其れにしては星は余り小さいといひます小さいとは眼で見ても小さいので眼で見ても小さいのが果して小さいのであるかどうか分らない家根の上から下を歩行く人を見れば小さい山の上から人の歩行くのを見ればまるで蟻アリのはふ様に見える其れだから人は小さいと言つたらどうでしよう（拍手喝采）遠い所は居るのだから小さく見えても實は非常に大きいかも知れない大きい小さいの争ひの例の距離の知れた上でなければ論にならな（拍手喝采）星の距離は月の距離を測りますのから見ますと餘ほどむつかしくなります第一今度は物さしが地球の直徑ではいけなくなります三千二百里もある物さしが最早や間よ合はなくなつて來ますからもう少し大きい物さしでなければなりません今度の物さしは地球の太陽の

ぐるりをまはる軌道の半徑即ち地球と太陽の距離を取りませう此物さしの兩端から測量して見ても大かたの星の距離は大きすぎて測量する事が出來ません先づ今日までに知れて居ります距離の中で一番近いのが今の物さしの二十二萬千八百倍であります地球から太陽までの距離が三千七百八十五萬里で随分大きなものですがこんな大きな物さしを工夫して見ましても二十二萬など、いふ大きな數がでますさつきの雛形を用ひますと海王星を太陽から三里ばかりの所へたきまして此星をば一萬九千九百里をかりの處よれかなければなりませんこんな長い距離は地球をぐるつとまへつてもありませんして見るといふと此の一番近ひ星まで往くには非常な距離を通らねばなりません箇様に遠に居ながらあの通りによく見ゆるからしては餘程明るいものであんなに小さく見えても實は非常に大きくなければならぬといふことが分つて參ります現よ此の割り合ひによつて見ますと我々に見ゆる星は中よは大陽よりは小さいのもありますよが大陽より大きいのもありますよ知れません

此の一番太陽に近ひ星は何であるかといふに不幸にして

瞬きをするほどの時間の掛りません月まで行きますにも



さしでなければなりません今度の物さしの地球の大陽の

いのもありますけれども知れません

此の一番大陽に近ひ星は何であるかといふに不幸にして東京からは見えませんが其れは「あるふーせん」といふ星でありますが其れは魔島邊か高知邊からは見ゆる星で八月の頃宵の中にちよいと出てやがてひつこむ星でありますこれが一番近い星であります近いと云つても随分遠いもう一つは白鳥宮といふ所は六十一號の星で今申した星から見ますと三倍ばかりも距離が遠い此の様には遠い距離になりますと雛形でもれつ付かなくなりずつと氣張つた物さしにしましても余り大きい數になりま

すから星學者は廣大無邊の物さしを作りまます其れは何であるかといふと明りの一秒時間に行く距離です明りの行くのはいくらか時を費します若し時間を費さないで行つたら不思議ですここで明りが或る所から出で或る所に達するにハ時間を費すに違ひ無いが併し餘ほど早いもので大陽から我々まで來ますに十分はかゝらない幾んど八分と少しで來ます丁度九段の坂下からこゝまで人力車で來る位な間にきます僅か一秒時間に七萬六千里ほど走りま

すから地球のかたつ方はの端からかたつ方はの端までゆくに

瞬きをするほどの時間の掛りません月まで行きますにも二「せこんど」はかゝりません其れが「あるふーせん」といふ星から來るにハ三年と六ヶ月かゝり白鳥宮からは其れの殆んど三倍九年と三ヶ月かゝりますてありますから其の星は何にか一朝變動が生ずるか或ハ全く此星がなくなりてもそれから九年と三ヶ月たつて始めて分る其れま

ては分りません明りが途中でまごついて居るから（聽衆笑ふ）

これからして外の星といふものハこれよりは遠い遠いといふことは知れて居るがぞれだけ遠いかといふことは知れません今まで申しました星ハ肉眼で見ゆる位な星です此外に望遠鏡でなければ見へない星が澤山あります

が

りれば小さいから見へないのか遠いから見へないかといふと其問題ハ本當には解けないいくらかの大きさに見ゆる星ハ小さいものが近所に居るのか大きなものが遠くに居るのか知れるものではない去りながら言つたら數多の星の中で大きく見ゆるのは近いので小さく見ゆるのは遠いのだと思へば平均の上では大違ひハあります



まいうことで色々な星の明りの分量を比較して段々と距離の比例を取ると非常の遠ほく居ます星があります今の「あるふぁー」とせんとれりいより一萬倍乃至三萬倍位の距離に居る星が儘にあるやうですこんな星から出立した明りは一萬年から三萬年ばかりも掛らなければ地球まで來ない三萬年の昔こんな星が無くなつて居ても我々の今に有ると思ふて居るです箇様を遠方にもし我々の親類が居ても便りといふは唯明り使ひばかりことによると餘程遅い新聞を受け取る様なことがあります（聴衆笑ふ）  
 うちで此等の星を觀測して見ると中には面白い星がある一つ二つ三つ四つなど、かたまつて居る星がある多くは散らばつて居ますが中にはこんなにかたまつて居ます先づ二つかたまつて居る星は肉眼で見ますと唯一つの星のふうに見えますが望遠鏡で見ますと二つに分れて見え多くハ一つは大きく今一つは小さくかたつ方がかたつ方を回つて居ます丁度地球が太陽を回り月が地球を回る様に見えます一つが親分であるが子でありませう併し太陽系でも明りを持たものハ太陽一つでした其の

世界では儘に明りを持つたものが二つはありますが外惑星のやうに明りを持たない眷屬が多分有るだらうと思はれますして見れば全く太陽系と同じやうな世界であります三つ以上組み合つて居る星も矢張同じやうな運動としておますのがありますして見ますと果して我々の太陽系は外ふつれがあるのです色々な星の中に二つ以上組み合つてある星でなければ本當に回つて居るか居らんか分らない様ですが肉眼では見えないがよく志らべると何らのぐるりを回つて居る様に見ゆるといふ場合がありますから此色々の星は皆太陽で其のぐるりに多分回つて居る惑星があると云ふことが察せられますそこで我々の太陽の同士が即ち此の星といふものであるといふことが分ります其の同士ハ非常に澤山あるのですから太陽系みたやうなもの天の中に澤山あります段々先きへ行くに従つてちつとづつ分りかねて參ります併しもう少し分るものがある其れハ何んでありますかといふと一体星といふものえどの邊には澤山あつてどの邊には少ないといふをからして我々の眼に見ゆる星ハ何に

かの部分を爲して居るといふことが粗ぼ分る様であります

ものは地球から見ますと帯のやうにして天をぐるつと取



併し大陽系を明りと持たものハ大陽一つでした其の

には少ないといふをからして我々の眼に見ゆる星ハ何に

かの部分を爲して居るといふとが粗ぼ分る様であります諸君御存じでありますよすが秋の頃天を見てれ出でなると眞白なものがありましよう雲かと思へば雲でない晴天の時も見ゆる併しなから少し月が出たり何にかすると見えなくなりますこれは「あまのがは」と言ひます西洋では乳道と言ひまを其れハ乳をこぼした様であるからさう言つたのであります支那でハ銀河といひます銀に其れを見立てたのは奇麗だからであります併し銀よりハ立派です銀が其れに譬へられて仕合せですとても銀などの及ぶことではないうれも昔ハ銀河はどんなものだからよくしれなかつたですが望遠鏡で見ますと「あまのがは」ハ全く星のかたまりです濃い所になりますと夥しく星がありますまず一体肉眼で見えない星が澤山ありますが其の中で此の「あまのがは」の上にある星が一番多い又「あまのがは」の外にある星の中でも精しく調へて見ると「あまのがは」の近所が一番多くてそれから次第に少くなる大きな粒々とした星はさうでもないが小さな星が「あまのがは」の方に行く程多いです其れからして此の「あまのがは」といふ

ものは地球から見ますと帯のやうにして天をぐるつと取りまいて居ますして見ますと其の中ハ我々が這入て居るに違ひない大方「あまのがは」といふものハ丸い者を推しつぶしたやうな形したものでありさうですそれだけは幾ど確かに見ゆる様であります其れには譬へを取らないといけません爰によい物があります「あまのがは」といふものハ（此時講談者机の上にありますととりて聴衆に示す）此盆の形をして居るとしましてうこの中に我々の大陽系かはいつて居るとしませと或る向には星が少く見えず或る別の所よは星が澤山見えませう而して星の澤山見ゆる部分ハ帯の形ちして天を取りまいて居る様は見ゆる筈でありますうこから見ますと「あまのがは」ハ星のかたまりで太陽も地球の仲間も其所の中ハ居るに違ひない其れですからさつきの問題をのぞいて地球ハ何の中であるかと言つたら大陽系大陽系ハ何の中かと言つたら「あまのがは」の中だと言ふことが出来ますあらゆる星は皆悉く「あまのがは」の中であらうか或ハ「あまのがは」の外にある星もあらうかあら方先づ「あまの



がは」の中でなければならぬ然るに中には「あまのがは」の形ちした星があるでない星のかたまりがあります望遠鏡で見ますと星のいくつとばなく簇つて居る者が澤山ある併し肉眼では見へません其れからして又其れと類似したものでやはり肉眼で見へず望遠鏡で見るといつても雲の様に見えて粒々とした星のかたまりの様に見えないのがあります其れは星雲と言ひまして近世になつて大層名高くなつたものであります此星雲の中に一寸とした望遠鏡で見ても唯雲のやうに見えるても少く強い目鏡で見ると星のかたまりのやうに見えるのもあり又今日世の中にある極上の望遠鏡で見ても矢張雲のやうに見えるのもありますそれとても矢張「あまのがは」見たやうな星のかたまりで望遠鏡のもつとよいのを用ひたら粒々に見えるものであるまいかといふ疑が起りますが此の頃分光器といふものが發明になりましてすべての物体が瓦斯か固体かといふを見わけることが出来るやうになりまして此の純粹の星雲は常の星と違つて瓦斯だといふことが志れました全く瓦斯を無いにしても瓦斯の部分が多

といふことです又其位置のといふと或は「あまのがは」の近所にあるものがあり或は「あまのがは」と方角違つたやうに見えるものもありますそこで又「あまのがは」の中にも大分瓦斯体であつて望遠鏡で見ても矢張雲のやうに見える部分もありますここに至つて説が二々通りつけられま

す或は「あまのがは」といふものゝ我々の見る所の限りですべてあるとあらゆるものゝ星でも星雲でも皆此の中に

はいつて居るものであるかもしれず或は「あまのがは」の外に「あまのがは」見た様なものが澤山散らけて居てそれが彼の所謂星雲で「あまのがは」からそれへ移るのゝ丁度我々の太陽系から脇の太陽系に移る様なものであるかもしれませぬ此二番目の説にすれば最初の問題は續けて太陽系は「あまのがは」の中「あまのがは」は數多ある星雲の中の一つだといへます併し此説は全く確な説ではありませんからつきりとはいへません事によれば第一の説のごとく我々の見ることを得るだけ随つて知ることを得る限りのものはすべて皆「あまのがは」の中にあるものでは無からうかとも思はれます若しもその通りであると始め

に御話しを申しました通りよ段々推しつめて行つて丁度

スト府の海濱實驗場ふ於て種々の軟体動物を煤助法を以



が志れました全く瓦斯を無いにしても瓦斯の部分が多い

無からうかとも思はれます若しもその通りであると始め

に御話しを申しました通りよ段々推しつめて行つて丁度今日の學問の有様では是迄といふ所までござつたかも知れませんが、いづれにしても私の最初に持ち出しました問題我々はどこに居るかといふ問題は立派にとけません我々が今日の學力ではとけるだけのどうかかといつたりもりでありませぬ

今日話したのハ地理書の先きを言つたので地理書は地球の中の事を調べる學問で私ハ地球の外へ出て言つたのでありますこれだけでは實は余り面白くないこれよりも此の世界ハ始末などであつて今にどんなことになるかといふ話し即ち世界の歴史だと大層面白くなる併しどの國の歴史を書くにも先づ其國の地圖から始めるが順序ですから私ハ今日地球の位置といふ題で全世界の地理をざつと話し申しました (拍手○采)

雜 錄

○煤助法 を施し人力を以て牡蠣を發生せしむるを得るは先年來米人ブルツクスの實驗に尋き米國水産局員の研究小頼り明白なるか今又米人パツテンなる者歐洲トリエ

スト府の海濱實驗場於て種々の軟体動物を煤助法を以て發生せしめんとを試みたる由此試驗に就き Zoologisch-  
or. Anzeiger. に投したる同氏の文ハ甚だ簡略にして文意曖昧たれとも Patella. (嬰の笠)と云へる一種にハ充分好結果を得たるを明瞭なり又パツテン氏の説ハ石決明の如きも煤助法を以て發生せしむるを得べしと此の説には記者も同意にて相當なる海濱實驗場に於て試みたらんには直に石決明に煤助法を施し得べきと證すべしと信するなり石決明ハ我國産の一にして近頃消滅の恐あるものなれば我邦に於て實驗するハ至當の事なり

○留學生朝歸 明治十五年二月中動物學修業のため滿三ヶ年の期限を以て文部省より獨逸國へ派遣したる官費留學生生理學士飯島魁ハ該國ライプツク大學に於て修業し且在學中動物學に關する著述を爲せしによりて金賞牌を受け尋いて「ドクトル、ラフ、フィロソフヒー」ノ學位を受領し本月七日歸朝したり(官報)

○九里龍作氏 兼より英國に於て機械工學を修業なし過般歸朝したる理學士九里龍作氏は去る一日東京大學准奏



任御用掛理學部勤務仰付られたり

○羅馬字雜誌 兼て世間おて待受たる羅馬字雜誌は過日羅馬字會に於て其一號を發兌せられたり是ハ我文章と洋文体ハ書き繼るとの初(外國人二三の出板あるにもせよ)なれば如何があらんと内々心配し居りたるものもありたれどもさすが有名なる洋學者連の仕事なれを至極立派に出來上りたり且つ印刷甚鮮明にして誤植等も僅なれば之も次號にハ追々消滅するに至らん然し余計のこの様なれども只一つ望むとは今少し上等の紙を用ひられんとなりさすれば雜誌の價格も尙ほ一層上進するを疑な

○聾啞人種の生出 米國にてハ從來所々に大なる聾啞院を設け之にて三萬余の聾啞生徒ヲ讀み書きより職業に至る迄懇に教へ居るとなるが電活機の發明者なるグレーアムベル氏は近頃一書を著して其弊害を痛く論ぜられたり其大意を擧げんに右の聾啞院にて大勢幼少のときより一所に寢食し且つ世間にて通用せざる一種の手眞似言葉を以て相互に交通し居れば思想も自然と他に異り英語とても殆んど外國語と見做す位のをにして縱令之を學ぶも甚

だ不充分なれば實に一の人種をなすと云ふも過言には非ざるべし此の如くなれハ卒業して退院するの後に雖通常の人と交際するを懶く思ひ可成從前の朋友と相親み結婚するにも大抵此中或ハ其親族(即ち聾性遺傳の傾向あるもの)の中より其配偶を撰めば設くる所の子は多く聾性を兩親より遺傳すと云ふ之れ想像上の空論ハ非ずして一々確なる統計表を以て證したるものなり今左に其二三と記さんに六ヶ所の聾啞院に在る聾啞の總數五千八百二十三人の中千七百十九人(殆んど三分の一)は其親族中多少の聾啞あるものなり又此總數五分の二は生れながら聾なるが其過半(百分の五十四、五)にハ聾啞の親族あり之れ生ながら聾なるものは生れたる後病氣等よて聾となるものに比すれば聾性と遺傳すると多き証據となすべし又生徒の系圖を取調れば祖父、父母、及び他の親族或ハ父母同胞(女)叔父、伯母、或は父母、兄弟一人、叔父二人等皆聾啞なりし例あり又或る家族にて聾の數十五人の多きありと云ふ之れ遺傳の恐るべきを知るに足れり前ハ擧げたる惣數中半は結婚し其中十分の八ハ同患のものを配偶となすと

云ふ而して此割合は七八十年前より追々増加し來れりと

二の諸氏にて頗る上出來なりと云ふ同日は出席人意外



も殆んど外國語と見做を位のとにして縦令之を學ぶも甚

中半は結婚し其中十分の八は同患のものを配偶となすと

云ふ而して此割合は七八十年前より追々増加し來れりと  
ベル氏の説に聾啞院の設立は聾啞の生活に快樂を與へん  
とて企たるものなるが其結果は其數を増殖するとなれば

二の諸氏にて頗る上出來なりと云ふ同日は出席人意外  
に多く殊小貴婦人方も多く來會されたれば當日の趣味も  
一層増し中々盛會なりしとぞ

社會の總体より之を論ずれを反つて大に害あり而して此  
法を改革せんと欲せば先づ聾啞を多數に集めて之に手眞  
似言葉を教ふるを止め其代りに小き學校にて之に通常  
の發音と他人の會話を唇舌等の運動よりして察するを  
教へ可成他の満足なる人間と掛け隔なき様注意するにあ  
りと又ベル氏研究の結果ハ聾啞のとに關係なく社會學上  
甚だ重要なものなり如何となれば之れ通常の動物のみ  
に限らず人類と雖淘汰によつて容易に變じ得るとの確な  
る證據にして人種改良に直接の關係あればなり

○學士の名譽 理學士吉田彦六郎氏は曾て漆の研究に従  
事せられて甚好結果を得られしが昨年エヂンボロに於て  
開設の山林博覽會へ右研究に係る論文并漆より分出し  
たる化合物數種の見本等を出品されたるが右ハ該博覽會  
に於て一般の好評を得し而已ならず倫敦の植物學會にて  
ハ之を非常ニ贊美し右論文を同會々誌に登載し且今回同  
氏の許へ金牌を送ると決したりと實に同氏の名譽と云  
ふべし

○英語會 の事ハ屢々本誌に記載せしが近來に至り同會  
は益盛美を來たり會員の數も餘程増加せし由なり又去る  
九日の例會にはシエキスピア著キング・ジョン物語輪讀の

○化學實驗室の新築 東京大學理學部の内化學冶金學採  
礦學の三科に屬する實驗室は今度本郷舊加賀邸内へ新築  
になる由よて建築家は文部省御用掛山口半六氏なりと

催しあり其中重なる役割は(キングジョン)神田乃武(キ  
ング、フリップ)小島憲之(パンドルフ)和田垣謙二(アー  
サ)コックス(コンスタンス)井上十吉(ヒュハルト)櫻井鏡

○醫學集談會 同會ニ於テハ今回左ノ件々ヲ議決セリ  
一 是迄毎月一回開會之處自今尙一回増會之事  
一 會日ハ毎月第三水曜日午後第四時ヨリトス  
一 會場ハ東京大學會議室ト定ム



一 此會ニ於テハ自家實驗ニ係ルモノヲ演述スルト者ス

一 演題ハ開會五日前ニ會員ヘ通知之事

繪入朝野新聞及毎日新聞

Rōmaji wo motte tsuzuri taru mono wo sukoshi zutsu nite mo nichichi kankō no shimbun ye idasan koto wa sejin wo shite Rōmaji wo yominarawasuru tame ni wa kiwamete kōnō okaran ga, "Eiri chōya shimbun" narabini "Mainichi shimbun" wa sho shimbun ni sakidachite sudeni Rōmaji no mono wo hibi tashō nosuru koto to seraretari. Honshi mo Eiri kisha no takken ni naraite Rōmaji wo motte kore wo kisu.

○大學生の同帽 近項上部方形の羅紗帽子又ハ尋常麥藁

帽子の前面に篆書にて大學と云ふ目標を附けたるものを冠れるわかうどを府下處々に見受くるが是等の人は東京大學の學生生徒たると一目して知るべし此帽子の功能に付大學よて其人ありと知られたる穂積陳重三宅秀外山正一の諸博士は去る八日大學理學部講義室に於て學生々徒の爲ふ演説せられたるが聽衆無慮千名にして拍手喝采の聲天地も裂る計なりき此帽子は麥藁の方價三十錢に足らず羅紗の方價一圓に足らず價より云ふときは甚賤きもの

なれども右三氏が懸河の雄辯と揮て何か説を附又之を戴

く所の頭蓋中の腦味噌は一塊よ付凡百萬圓と演説者が價附けたれば則ち帽子も從て貴きものとはなりにけり諸數百の學生生徒が同帽を戴くときは何となく相互よ兄弟の情を生して相互に品行を正うし相互に親睦し相互に其修むる所の學問と獎勵するの風となすべければ誠に結構の事にこそ又同學校教員中に右の帽子を冠る人あるが是等は演説者の所謂老成儼のなき人々なるか

○東京大學及豫備門競技運動會 去る六日本郷大學内に

於て同會の催しありたるを其頃の諸新聞紙にも見へたるが今その景況の大略を記さんよ同日は頗る好天氣にていかも土曜日のとなれば午後一時競技の始まる頃には會員並に招待に應じて來會したる内外の諸紳士及び貴婦人の數は無慮三千人程に及べり扱て當日の競技番付は(第一)百ヤルド競走(第二)クリケット玉投げ方(第三)百ヤルド最後競走(第四)高飛(第五)二百廿ヤルド競走(第六)大砲玉投げ方(第七)二百二十ヤルド最後競走(第八)長飛(第九)四百四十ヤルド競走(第十)來客競走(第十一)



す羅紗の方價一圓に足らず價より云ふときは甚賤きもの

長飛(第九)四百四十ヤルド競走(第十)來客競走(第十一)

飛走(第十二)杆飛(第十三)最後の飛走(第十四)槌の抛け方(第十五)八百八十ヤルド競走(第十六)教員競走(第十七)一足競走(第十八)慰メ競走よして全く修りたるは七時半頃なりし又當日の勝者人名並に其の得たる賞品は左の如し

クリケット玉抛け方

(一)管原 傳(八十ヤルド)賞品西洋文庫(二)酒井佐保賞品本箱(三)吉井友兄賞品硯(四)山田堯扶賞品印肉入

百ヤルド最後競走

(一)村瀬光國賞品鎖付懷中時計(二)堀尾權太郎賞品懷中紙入(三)松原鏡藏賞品押紙本(四)奥山岩太郎賞品ナイフ

高飛

(一)管原 傳(四フ<sup>#</sup>ト三インチ)賞品寫真挾(二)武井才二郎賞品水繪々の具(三)日高眞實賞品臺付ガラスインキ入

大砲玉投げ方(目方十四斤)

(一)山田文太郎(三十六フ<sup>#</sup>ト)賞品大カバン(二)松原鏡藏賞品西洋化粧箱(三)武田千代三郎賞品インキ壺(四)武

井才二郎賞品筆掛け

二百二十ヤルド最後競走

(一)村瀬光國賞品寫真挾(二)内田定槌賞品茶簞笥(三)野村彌三郎賞品米國板遊戲書(四)橋本圭三郎賞品英國製杖

長飛

(一)山田研一(十五フ<sup>#</sup>ト六インチ)鎖付懷中時計(二)武田千代三郎皮胴亂(三)伊集院彦吉桐用簞笥(四)吉武榮之進紙切ベラ

四百四十ヤルド競走

(一)志摩友雄學生ランプ(二)三池貞一郎旅行用フラスコ(三)吉武榮之進臺付ガラスインキ入(四)久留製造書籍袋

來客競走

(一)横濱運動會々員アポット賞品銀製コップ及皿

杆飛

(一)田中靜次(七フ<sup>#</sup>ト七インチ)目覺時計(二)伊東祐徳茶簞笥(三)大久保利和金シヤツポタン(四)和田義睦マラツカ製杖

槌の抛け方



(一)野村彌三郎(七十六フ)ト四インチ(圖引器械)(二)田中靜次本箱(三)志立鉄二郎鏡付懷中物(四)諏訪萬吉シヤツポタン

最後の飛走

(一)奥山岩太郎兩眼鏡(二)松原銳藏インキ壺(三)村瀬光國晴雨計(四)大久保利和シヤツポタン

八百八十ヤルド競走

(一)志摩友雄橫濱より來觀したる外國人より寄贈なりたる金員(志摩氏は此賞金を以てウエブストル大字書を買ひたりと云ふ)(二)神崎東藏、鎮付懷中時計(三)久留契造カバン(四)武井才二郎英國板遊戲書(五)中谷弘吉黒檀杖(六)野田十代次紙切ベラ

教員競走

(一)棚橋一郎銀コップ(二)穂積陳重縫箔したる紙入(三)土方寧紙切ベラ(四)千頭徳馬飾リ針

一足競走

(一)吉武榮之進學生ランブ(二)奥山岩太郎寫真挾(三)田沼義三郎唐金筆立(四)大塚熊雄硯

慰め競走

(一)季家隆介目覺一時計(二)山下啓太郎鏡臺  
さて右賞品は來客競走の時に限りストレンジ夫人之を直に勝者即ちアポト氏に渡され其他ハ悉皆競技の終りに於て穂積夫人より各勝者へ渡されたりまた此度の賞品は大

學及び豫備門の教員たちが寄附されたるものゝ由にて斯く競技運動を奨勵さくるハ最と悦をしきとなり而して當日會場に於て諸事成整したるハ全く同會の事務委員なるストレンジ、ノット、田中館、山口、能勢、乾、金井、五君の幹旋より由るものと信ず

應 問

○駿河國野村美策氏ニ答フ

一、理學協會事務所 東京府芝區西ノ久保明船町壹番地  
雜誌十四號ヨリ發賣ス 二、東京生物學會 東京大學ニ會ス 雜誌ヲ發兌セス 三、東京植物學會 東京大學植物園ニ會ス 未タ雜誌發兌セス 四、東京化學會 東京大學ニ會ス 雜誌ヲ發賣セス 五、東京數學物理學會 東京府麴町區富士見町貳丁目六番地 雜誌ヲ發兌セス  
此他ニ物理學會アルヲ知ラス 記事ヲ發賣ス

本誌第十一號ヨリ第二十號迄ノ合本ハ近日發行ス

西村三郎氏ニ答フ

第一問蝶類貯藏云々

蟲類ヲ留針ニシ刺シ乾燥シタル后羽翼ノ剝離スルハ手置ノ不充分ヨリ生スルモノナリ總テ乾燥シタル蟲類ハ空氣ノ餘リ流通セサル箱ニ入レ充分ニナフサリン(樟腦或ハ石灰酸ニテモ宜シ)ヲ入レ置ケハ容易ニ脆クナラサルモノナリ虫類ヲ乾燥スル時少々注意ヲ要スルコトハ其腹部ノ尖頭カ下向シテ彎曲シ貯藏箱ノ引出ノ底ニ觸レサル様ニ

致スヘシ虫ノ体ヨリ流出スル液汁ハ度々引出ヲ汚スコア

大陸愛ニ郡集ス之ヲ地理學者ニ問ヘハ北半球ニハ四分三



て穂積夫人より各勝者へ渡されたりまた此度の賞品は大

尖頭カ下向シテ彎曲シ貯藏箱ノ引出ノ底ニ觸レサル様ニ

致スヘシ虫ノ体ヨリ流出スル液汁ハ度々引出ヲ汚スア  
リ又々腹部ノ尖頭カ引出ノ底ニ觸レル、處ヨリ腐敗ヲ生  
スルヲ多シ

第二問植物ノ花又葉ヲ貯ルニ云々

娛樂ノ爲ニハイザ知ラス學術上植物ヲ貯フルニハ唯  
花葉ノミヲ以テスベカラズ草本ナレバ其全体(根莖葉花)  
ニ收メ木本ナレバ其枝椹ニ花葉ノ着キタルマ、  
ヲ摘ミテ貯ヘザレハ用ヲナサス而テ之ヲ製スルニハ  
數枚ノ紙ノ間ニ彼ノ標品ヲ挾ミテ日々潤フタル紙ヲ  
カヘテ乾腊スルニ在リ然ルニ乾燥スルニ隨テ花葉  
ノ生色ヲ變褪スルハ止ムヲ得サルヲニテ別ニ之ヲ防  
クノ法ナシト雖學術上ニハ花葉何程退色シタリトテ  
少シモ差支ノアルヲナキナリ但シ乾燥シタル後ニ花  
色ヲ知ラント欲セハ乾腊スル前ニ花色其他ノ模様ヲ  
紙片ニ詳記シ置カンヲ肝要ナリ

雜錄

何故ニ北半球ニハ大陸多キ歟

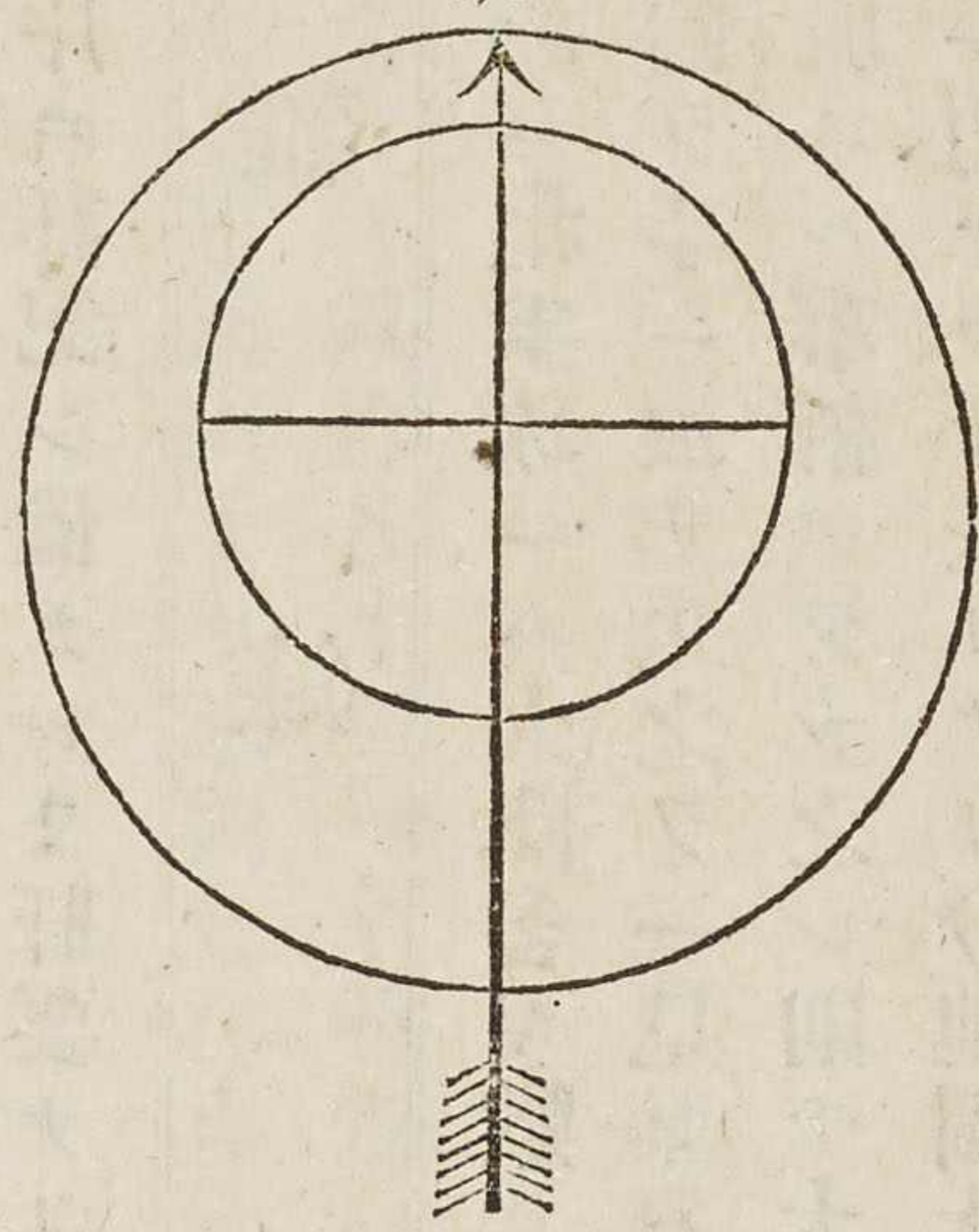
地球全圖ヲ手ニ取リテ之ヲ一見セハ忽チニシテ胸裏ニ疑  
惑ヲ醸成スル事柄アラシク之レ則チ大陸ノ一方ニ偏シ陸洋  
散布ノ平均ナラサルヲナリ今地圖上ニ南亞米利加白露ヨ  
リ亞細亞南部ノ馬拉加半島ヲ通シ全地球ニ一直線ヲ劃セ  
ハ南半球ニ於テハ濠斯太利南米ノ一部及ヒ亞弗利加ノ一  
部ヲ除キ殘餘ハ渺茫タル大洋ナリ翻リテ北半球ヲ顧レハ

大陸爰ニ郡集ス之ヲ地理學者ニ問ヘハ北半球ニハ四分三  
大陸ニテ四分一ハ海洋ナリト簡單ニ答フルノミニテ如何  
ナル理由ニ據リ斯クナルヤハ敢テ明言スルモノ無シ頃日  
スカリキ一氏ナル人陸洋不平均ノ原因ニ考説ヲ下セリ其  
説最モ實ニ近キヲ信スルヲ以テ左ニ其大綱ヲ抄譯ス  
太古吾地球未タ酷熱ノ火團ナリシト心ニ畫カキ現時ノ  
如ク外部ノ固形体未タ存立セサリシトキヲ懷古セハ其解  
説最モ簡單ナリ登時ハ今日ノ地球ヲ組織スル物体悉ク瓦  
斯体若クハ流動体ニテ固體ハ更ニ存セス故ニ地球ノ組織  
物ノ分子ハ流動自由ナルニ由リ重キ鉄ノ如キ物ハ熔液ト  
ナリ沈ミ輕クシテ早ク固體トナルヘキ物ハ尙ホ瓦斯ト成  
リ居リテ浮漂シ彼ノ火球ヲ繞圍セルヲ以テ萬物未タ化合  
スルノ時期ヲ得ス斯ク自在ニ流動シツ、アリシモノナル  
ニ漸々自熱ヲ放散シ冷結スルニ從テ化合力ヲ増殖シ無數  
無量ノ化合物ヲ造成スルニ至レリ  
今尙シ斯ノ時ニ際シ地球ハ更ニ宇宙間ニ自轉シ又大陽ヲ  
中央トシテ周轉セサリシモノト見做セハ地球外部ノ上ニ  
沈澱シ固形体トナリシ物体ハ何レノ處モ平均ノ重層ヲ爲  
セシナラン  
外皮既ニ成レハ地球内部ノ酷熱ナル物体ハ尙ホ溶盪シ自  
熱ヲ宇宙ニ放散セシメントスレハ外皮ノ爲ニ多少遮斷セ  
ラレ隨テ外圍ノ空氣モ今ハ冷氣ヲ増殖シ原ト氛圍氣中ニ  
浮遊シタルモノモ冷ムレハ物体ノ親和力増スト云フ化學  
ノ原則ニ據リ結合シ地上ニ沈澱シ疊々積ンテ岩石ノ累層



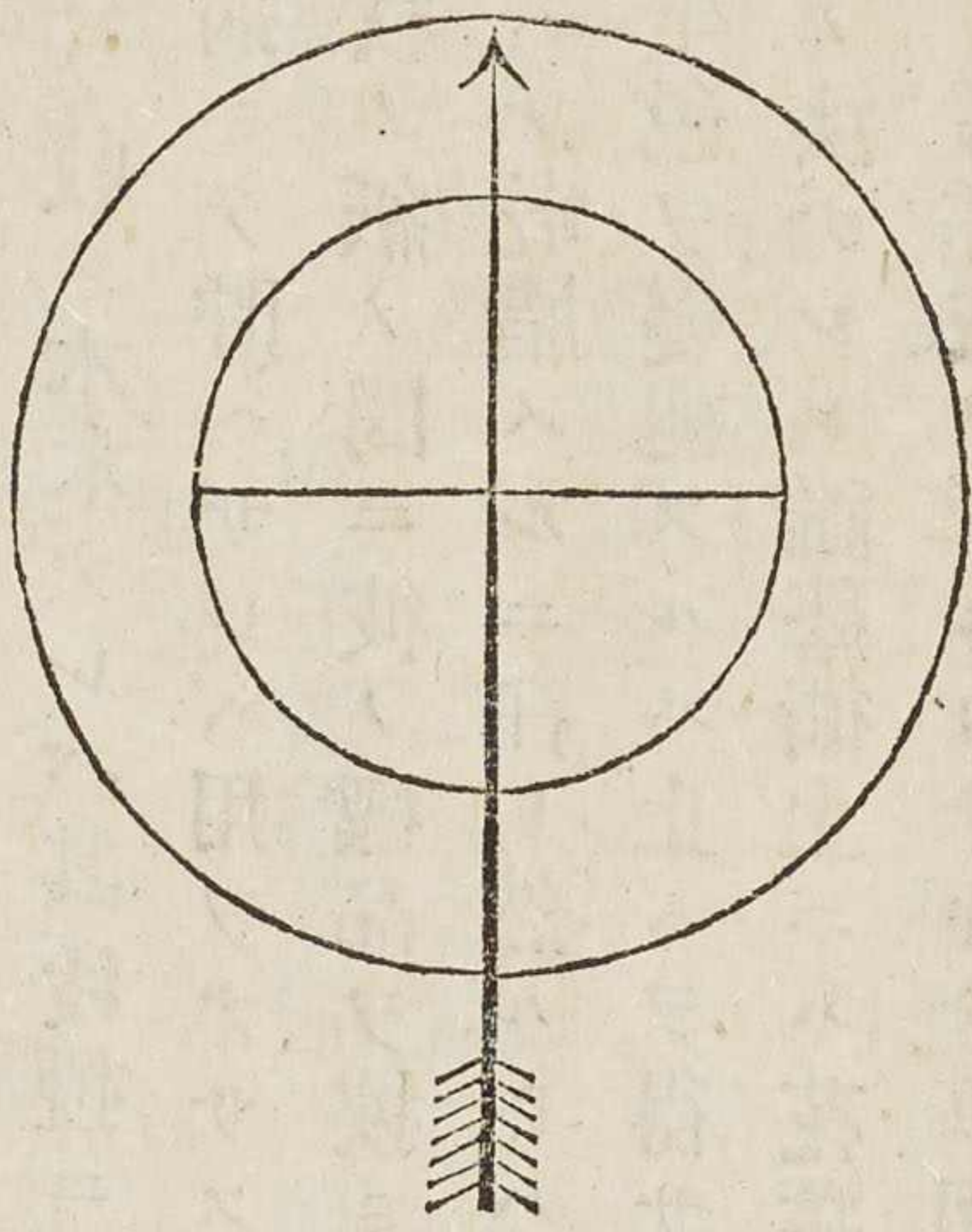
ヲ作シ地上到ル處同シ厚サノ外皮ヲ造爲セシナランサレト之ハ地球ヲ不動体ト見做セシトキノ臆說ナレハ今地球

第一圖



ハ創成ノ時ヨリ回轉セシモノト爲スルハ如何ナル變換ヲ惹キ起スヤハ下文ノ釋說ヲ待チテ知ルヘシ

第二圖



地球尙シ不動体ナレハ第一圖ノ如キ状態ヲ呈シ内輪ハ地球ニテ外輪ハ之ヲ繞圍スル氣圍氣ト見做シ空氣圍ノ厚サモ一樣ナルヘキモ地球ヲ動体ト考定スルハ地球ハ北極ニ近ツキ氣圍氣ハ多少之レニ抵抗スルノ狀ヲ呈スルナ

ラン斯ノ場合ニ於テハ氣圍氣ノ抵抗力ハ縱令聊カナレモ全ク無キニシモ非ラサレハ地球ノ面積ノ大ナルト其回轉ノ速力著シキカ爲メニ空氣圍ハ壓偏サレ第二圖ノ如キ状態ヲ呈スヘシ右ノ情實ハ即チ大陸偏存ノ萌芽ナリ  
第二圖ノ如ク北極ハ南極ヨリハ空氣層稀薄ナル爲タニ地球内部ノ熱湯液モ自熱ヲ放散スルヲ南極ヨリハ多量ニシ

テ北極ハ隨テ冷結ノ度強ク寒サモ比較上嚴ナルカ爲ニ地皮ノ直徑モ厚ク爲リ空中ヨリノ岩石成分ノ沈澱モ量ヲ増スノ理ナレハ北極空氣層薄キトモ北極地方ハ地層厚ク地球全体ニ關シテハ平均ノ權衡ヲ得ルナリ右ノ理由ニ依リ北半球即チ北極ニ偏セシ地方ニハ大陸多キニ居レリ

○四月二十三日ハイデルベルヒ府發井上哲次郎氏來翰頃日當所春色十分到ル處ノ園林櫻杏亂レ開キ種々ノ草卉亦競發シテ其間ヲ點綴シ景色頗ル佳氣候亦甚タ人ニ可ナリ前便獨乙學問ノ模様ヲ報道シタル處忽卒稿ヲ裁シ誤謬モアリ遺漏モ少カラザルユエ今茲ニ聊カ修補ヲナサントス

會テ當所ニアリシ碩學九名ヲ算シタリシガ其中メラシクソクン氏ノミハ學生トシテ茲ニ在リシニテ其他ハ皆教授ニテアリシナリコノ外前便ニ漏レタル碩學ヲ舉グレバ詩人  
フオス 千八百五年 法學家チバウ 千八百六年 動物家ブロン 千八百二十年 宗教家ローテ 千八百十七年 哲學家ライヒリン、メルヂック 千八百四十年  
解剖家ヘンレ 千八百十四年 生理家モレシヨット 千八百十七年 博言家ホルツマン 千八百十二年 化學家グメリン 千八百十七年 博言家クロイチエル 千八百四年 哲學家ダウブ 千七百九十四年 宗教家パウルス 千八百十一年 植物家ホフマイスター 千八百十三年 諸氏アリ皆會テ當大學ノ教授タリ獨モレシヨット氏ハ「プリフハトドチエン」ニテアリキ氏ハ熱心ナル唯物論者ナリシガ遂ニ之レ

ガ爲メニ宮ヲ解カレタリト云フ

トカヤ婦人ハ之ガ爲メニ大ニ怒リ遂ニ氏ニ嫁クヲ肯セ



球内部ノ熱湯液モ自熱ヲ放散スルヲ南極ヨリハ多量ニシ

トニテアリキ氏ハ熱心ナル唯物論者ナリシガ遂ニ之レ

が爲メニ官ヲ解カレタリト云フ  
前便ニ法律家フハゲロー氏トアルハフハンゲロー氏ノ誤  
寫ナリ

化學家ブンゼン氏ノ事ハ前便ニテ申送リタルガ更ニ逸事  
二三ヲ補述スベシ

ブンゼン氏ハキルヒホフ氏ト共ニ光線分析法ニ據テウオ  
ラストンフラウンホーフエルブリユースリ諸氏ヲ經テ  
未タ明カナラザリシ所ノ太陽分光中ノ黑線ヲ説明シ遂ニ  
太陽ヲ構造セル原素ヲ發見シ併セテ「シ—シオム」及「ヒ—ル  
—ビヂオム」ノ二原素ヲ發明スルニ至レリコレヨリジ  
ヤンセンロッキヤ—レスピギ—ミラー—ホッギンヌ諸氏亦同

一ノ方法ニ由テ種々星學上ノ説明ヲナスヲ得タリ蓋シ光  
線分析法ハ近代ノ大發明ト謂フベキモノニシテブンゼン  
キルヒホフ二氏ノ功最モ大ナリト謂フベシ然ルニ二氏ハ

互ニ相辭讓シキルヒホフ氏ハ之ヲ以テブンゼン氏ノ發明  
ニ出デタリトナシブンゼン氏ハ之ヲ以テキルヒホフ氏ノ  
發明ナリトシ各自ラ其功ニ居ルヲ欲セザリシガ遂ニ二氏

ノ發明トスルニ至レリト云フライプニツニユ—ト—二氏  
ガ「カルクロス」ノ發明ヲ爭ヒタル話ト異ナリテイト牀シ  
ク聞ユ

ブンゼン氏曾テ婚姻セントシ新婦ハ艶裝シテ寺院ニ赴キ  
氏ノ來ルヲ待チシニ時刻ヲ過グレ至ラズ如何セシヤト  
怪ミ其子細ヲ尋ヌレバ是日氏ハ實驗室ニ在リテ專ラ化學  
上ノ實驗ニ精神ヲ凝ラシ遂ニ全ク婚儀ノ事ヲ忘レ居タリ

トカヤ婦人ハ之ガ爲メニ大ニ怒リ遂ニ氏ニ嫁クヲ肯セ  
ス氏モ亦婚姻ヲウルサキコニ思ヒ遂ニ復タ娶ルヲ欲セズ  
今年齡己ニ七十四歳ナレモ全ク獨身ニテ專ラ學問上ノ事  
ニノミ熱心セラル亦以テ眞學士ノ風采ヲ想見スベシ

獨乙ノ人ニテ有名ナル宗教家ニブンゼン氏アリ同姓ナレ  
モ氏トハ全ク關係ナキ人ニテ千七百九十一年ヲ以テ生レ  
千八百六十年ヲ以テ歿セリ英人某曾テ珈琲店ニ於テ氏  
家ブンゼン氏ニ邂逅シ盛ニ氏カ宗教ニ効アルコヲ稱揚シテ觀面

ノ榮ヲ獲タルヲ喜ビシカバ氏ハ之ヲ迷惑ニ思ヒ否ソレハ  
拙者ノ事ニ非ズトイハレタルニ某ハ之ヲ信ゼズ益々氏ノ  
謙遜ナルニ服シ其德ヲ賞讚シテ己マザリシカバ氏ハ答ヘ  
テ成程拙者ハ曩ニ宗教上ニ力ヲ盡シタリシガ千八百六十

年以來ハ全ク化學家トナレリトイハレシトカヤ  
當大學ノ教授ニコツプトイヘル人アリ最モ化學史ヲ以テ  
名アリ其所著化學史己ニ世ニ行ハル蓋シ我邦人ノ知ル所

ナルベシ是人ブンゼン氏ト友トシ善シ常ニ相伴フテ街上  
ヲ散歩ス然ルニコツプ氏ハ丈卑クブンゼン氏ハ丈高キガ  
故ブンゼン氏ハ俯シテニコツプ氏ヲ視コツプ氏ハ仰テブン

ゼン氏ヲ視コツプ氏ノ口ニクハヘタル卷烟草ハ下向シプ  
ンゼン氏ノ口ニクハヘタル卷烟草ハ上向シ二人共全ク他  
事ヲ忘レテ歩行スル故市人ハ之ヲ一笑话トセリ

コツプ氏ハ又夏曉ナド早起シテ獨リ街頭ニ出デ兩腕ヲ組  
ミ微聲ニテ何トモ聞取リ難キ歌ヲ歌ヒ全身ヲ左右ニユス  
ルノ癖アリ其姿態ノ如何ニモ奇異ニシテ可笑シキユエ兒

ルノ癖アリ其姿態ノ如何ニモ奇異ニシテ可笑シキユエ兒



童モ亦氏ヲ知ルニ至レリ

原トブンゼン氏ノ助手タリシコルペ氏ハライプチヒ大學ノ化學教授ニテ著述モ多ク隨分有名ナル學者ナリシガ客冬逝去セシカバブンゼン氏ハ一方ナラズ悼惜セラレタリ前便ニ歴史家ウエーベル氏モ曾テ當大學ノ教授タリシ様ニ記セシハ誤リニテ氏ハリアル、シユーレノ校長タリシヲハアレヒ大學ノ教授タリシコハナシ氏ハ己ニ七十七ノ高齡ニテ所著萬國史十二卷世ニ行ハル其他猶數種アリ皆史類ナリ

前便ニ歴史家ドロイゼン氏ト記セシハラシゲ氏ノ誤寫ニテドロイゼン氏ハ己ニ死シ其子ハ今ハレ大學ニ在リランゲ氏ハ方今ノ大家ニテ著書頗ル夥シランゲ派トテ一學派ヲ成シゲイツドウンケルギーゼブレヒトシペルヤツフエ諸氏皆之ニ屬ス氏今年既ニ九十歳猶著述ニ從事シ自ラ筆ヲ執ルヲ難キユエ口述シテ他人ニ書取ラセ億ルレバ寢牀ニ就キ元氣復スレバ又起テ演述ヲナスト云フ

頃日菊池大麓君來遊二日間滯留セララル五月頃歸朝ノ積リナル由斯波淳六郎穂積八束ノ二氏ハ曩キニ當所ニアリシガ三月中旬伯林ニ赴タキリ現今當所ニ在ルモノ小生ノ外宮崎道三郎木場貞長郷誠之助及匹田新平ノ四名アリ

乙酉歲。僑居于襄垣爾堡。一夜偶賦此。我邦吟壇諸先輩賜和。則幸甚。 在獨國 井上巽軒

飄蓬遊萬里、山畔坐芸牕、斯道竊欲究、攤卷夜對缸、古人蹤難逐、愧我心愚惹、倒瀾蚤欲挽、似當車食厖、禮記月令疏螳螂燕趙之際謂

之食 龐 齡已逼而立、醒醒徒學螻、挪揄詎得免、椎魯奈目眩、况復鮮同志、空谷不聽楚、此身足辛苦、世途太崆嶠、轉軻嘆不遇、難堪恨滿腔、推牕欲遣悶、長天一何驪、雨歇雲亂走、水漲湟加江、渺漫入萊印、沒盡處々缸、柳外遠漁火、閃澹大如虹、岸頭草樹暗、打巖水淙々、瀟瀟亂流際、突怒幾朽椿、河伯援風伯、似倒千百龍、雲裂歛漏月、萬里望恢澤、夜鳥驚明爽、飛昇兩三雙、吟客李白侶、溯流一輕篋、柔櫓斷水急、玉散何琤琮、我性好幽雅、塵寰厭紛囂、崎嶇圖抖擻、也不異尋樁、西京賦都盧尋樁注人于長木上自以手緣懸繩而度也 不如拋塵事、中流泛短艫、浩歌對明月、倒盡酒百缸、汪洋自恣耳、向誰意氣降、古今三千歲、東西幾百邦、永有江山樂、世變笑相腔、百歲恐其短、欲求益壽壑、宋人小說徐延評監廬州稅河坎得一物如小兒掌之能益壽 無指懼而埋之或曰此白澤圖所謂壑也神仙多食

○東京化學會記事 五月十六日午後一時ヨリ例場ニ會ス工學會ヨリ同會々誌第四十卷ヲ日本鑛業會ヨリ同會々誌第二號ヲ地學會ヨリ同會々誌第一輯第一卷ヲ農商務省ヨリ專賣特許願人心得一冊ヲ本會へ寄贈セラレタリ野秋健八郎氏ハ會員高山甚太郎氏久田督氏ノ紹介ヲ以テ本會へ入會ヲ申込マレタルガ本日出席會員ノ投票ヲ以テ入會ヲ許サレタリ吉田彦六郎氏樟腦油成分ノ化學的研究ニ付キ演說ス次ニ櫻井錠二氏燐素炭素ノ如キ燃燒体ト雖濕氣ノ伴フコトナキトキハ酸素中タリトモ燃燒セサルヲ述ブ此日出席會員二十一名ナリ

○地學會記事 五月十九日農商務省地質調査所ニ放テ例會ヲ開ク正員中嶋謙三君日本地學沿革史前會ノ續キヲ述ヘ次ニ正員山田皓君本邦火山發年代記ヲ演ス出席會員十四人ナリ